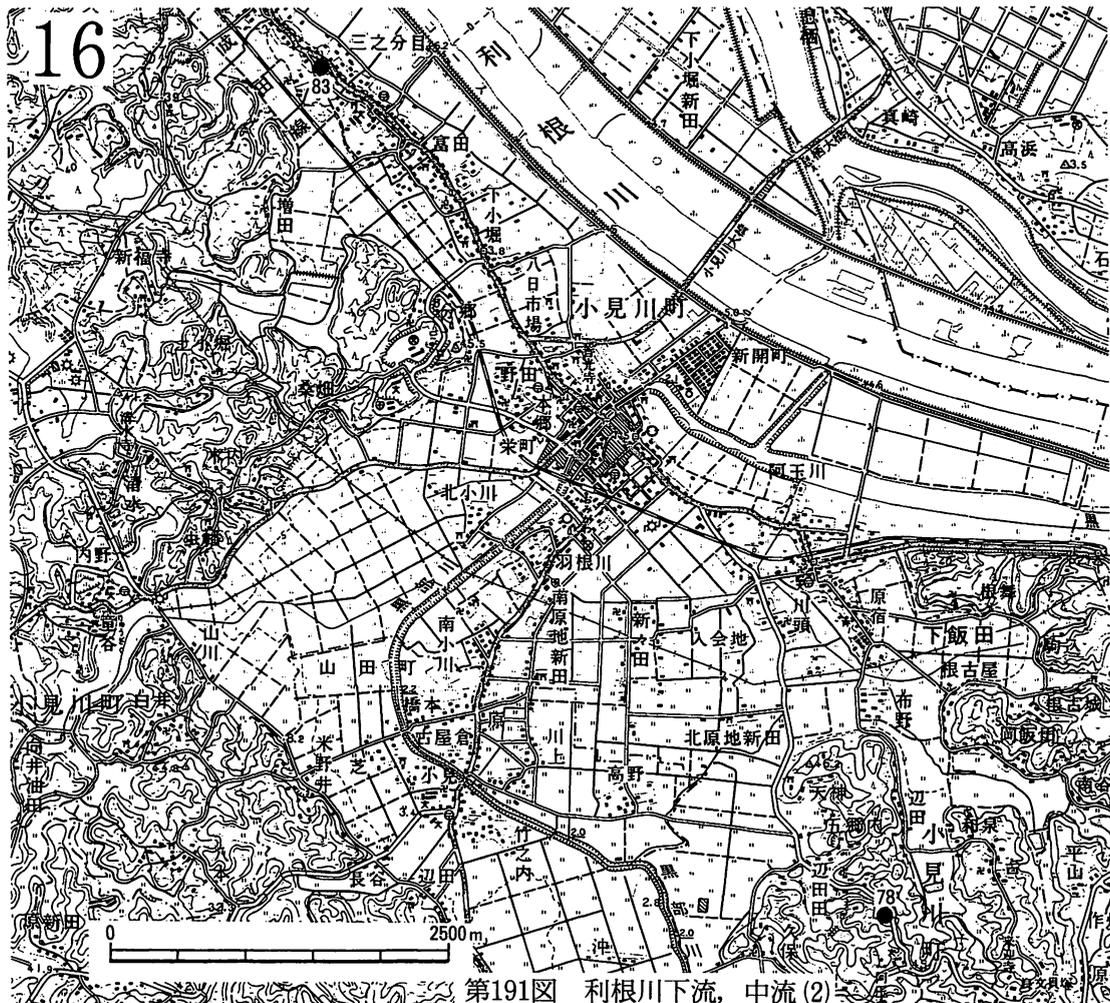


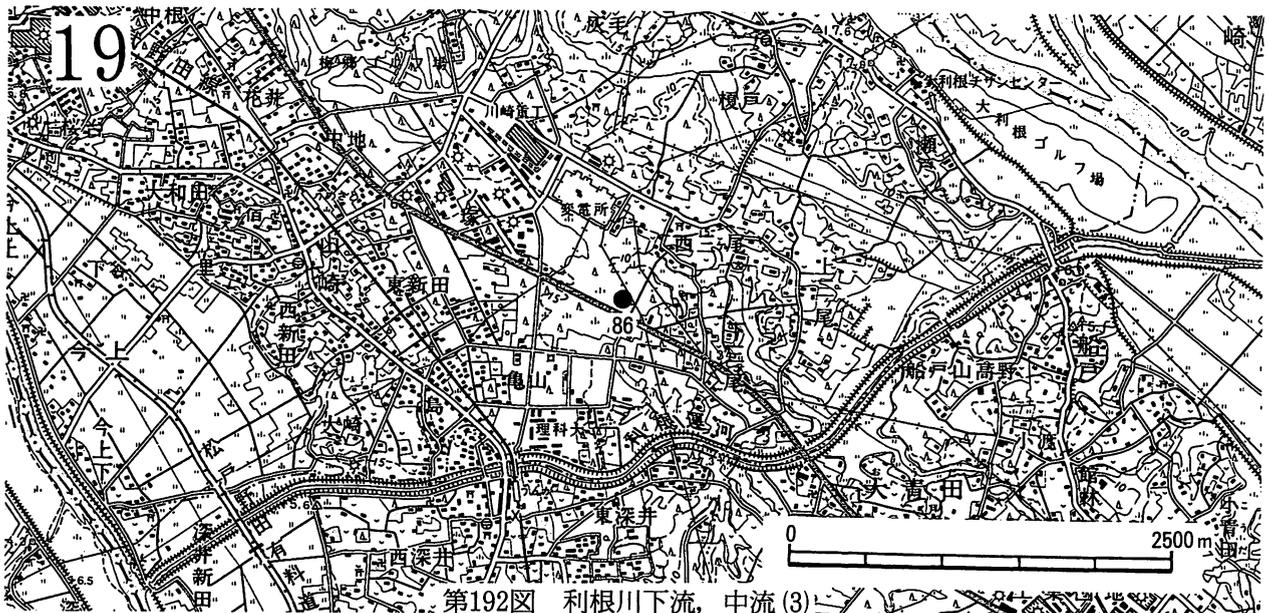
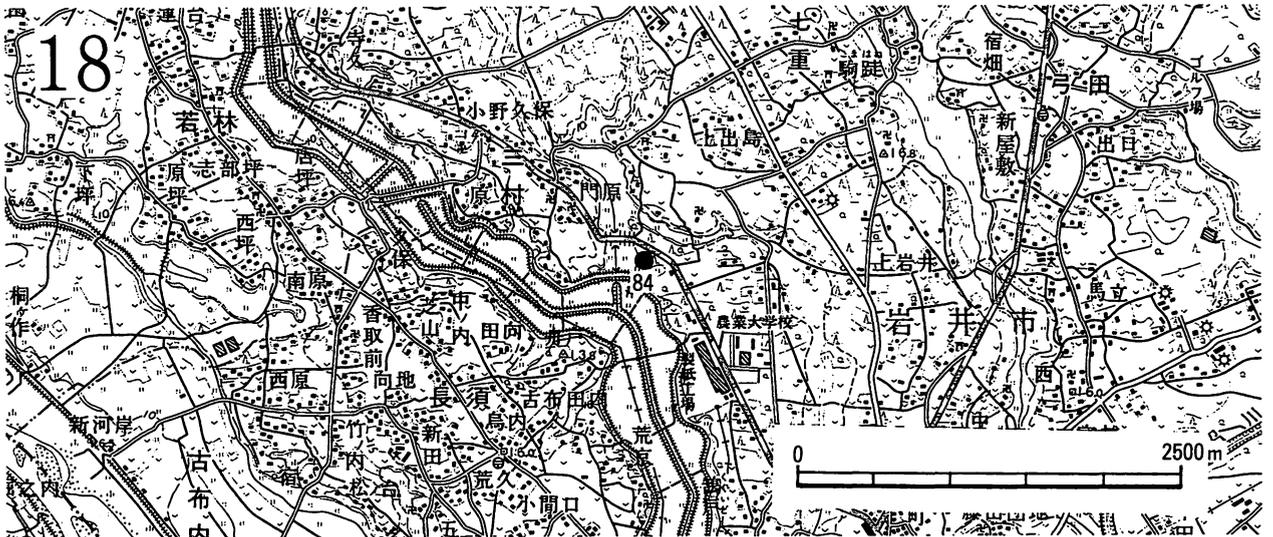
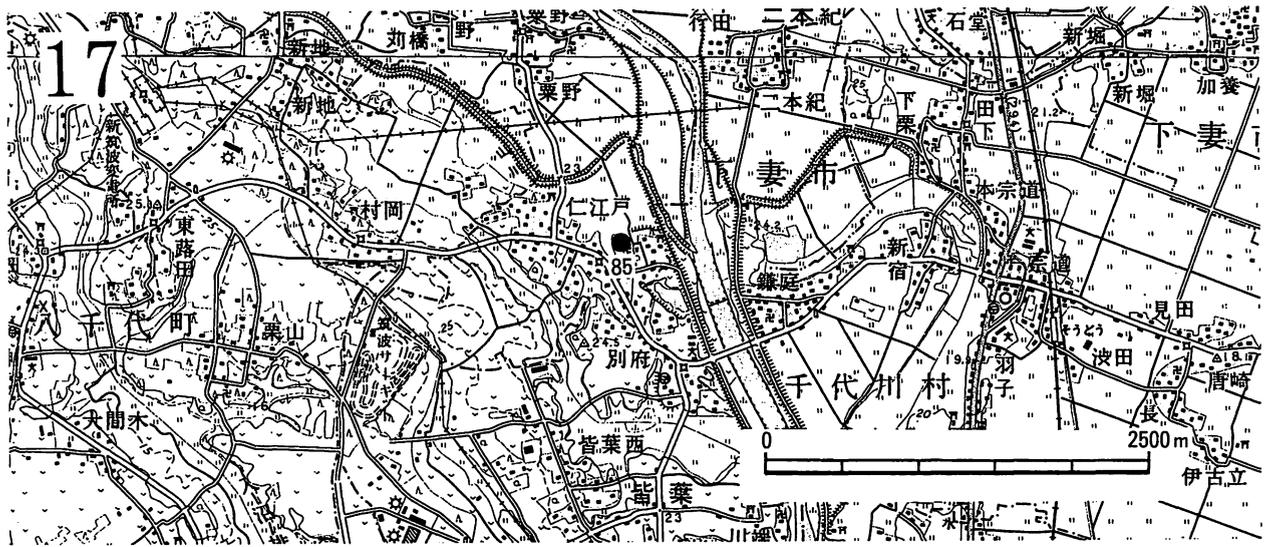
第8節 利根川下流，中流

日本有数の流域面積を誇る利根川は、東葛飾郡関宿町付近から銚子港付近に至る、延長約115kmに及ぶ沖積地を形成している。河床傾斜がゆるやかで、洪水の害を受けやすい一方、その都度作り上げられた自然堤防上には古代からの遺跡も数多い。古墳時代において、現茨城県と利根川を挟んでお互いの地域交流があったことは、多くの共通する遺物の出土でも明らかであり、古くから文化、物資輸送上の大動脈であったことは間違いない。前期古墳及び集落は、利根川低地を眼下に見下ろす台地縁辺に多い。袋小路的な位置にも見えるが、大日山古墳等有力な前方後円墳の存在は、この地域にも積極的な古墳文化の波及があったことの証明である。





第191図 利根川下流, 中流 (2)

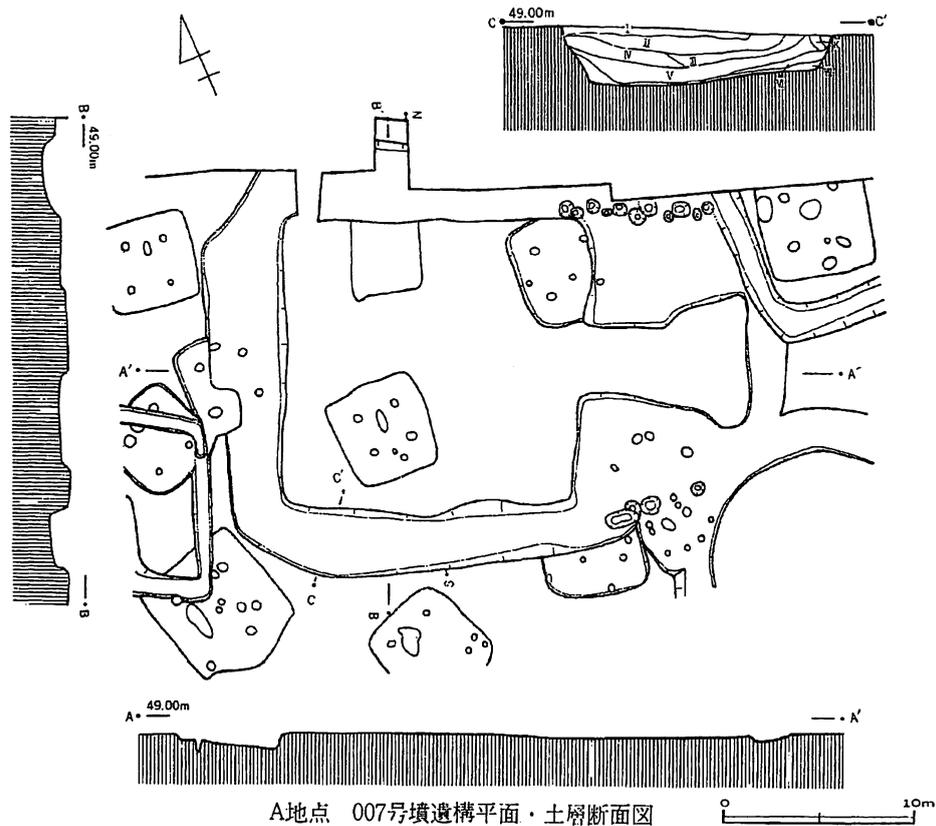


第192図 利根川下流，中流(3)

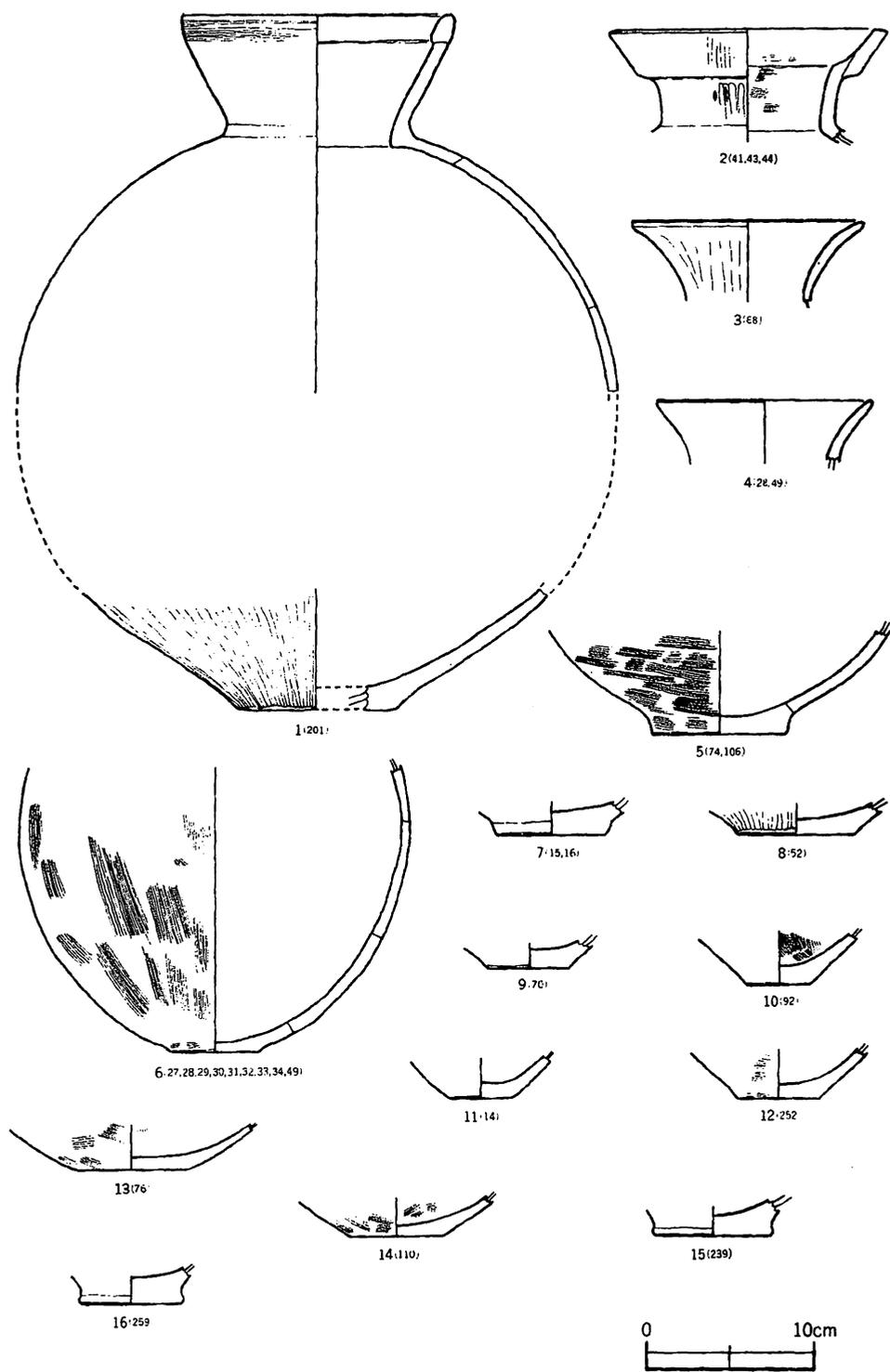
78-(1) 阿玉台北 (あたまだいきた) A-7号墳 (第193~195図) 草刈Ⅱ期併行

- ①所在地 香取郡小見川町五郷内字立山
- ②墳形 前方後方墳
- ③規模 周溝外径全長32m, 内径25.5m 後方部内径16m×16m, 前方部内径9.5m×7.5m
- ④墳丘 僅かに残る
- ⑤主体部 不明
- ⑥概要 利根川の河岸より約4km南側で西方には黒部川により沖積地が広がる。A地点は台地平坦面約5,500㎡, 最高標高49.58mを測る。古墳に伴う遺物はいずれも周溝内出土であり, 報告者は「すべて混入品」と報告しているが具体的な説明はない。確かに縄文土器から古墳時代後期の土師器まで混在するものの, 型的にはいくつかのグループに分類され, 古墳に伴う一定幅の一群を捉えることは可能である。阿玉台北遺跡については, 前述したとおり当該土器は3期区分が可能であり, 結論から言えば, 内湾脚高坏 (37), 脚裾広がり高坏 (38), (39), 有稜高坏 (51) については東海西部 (廻間Ⅰ式~Ⅱ式前半頃) に見られる外来系であり, 阿玉台北1期 (草刈Ⅰ期前半併行) に, 有段口縁壺 (2), 小形器台 (50) 及び壺 (1) については阿玉台北2期 (草刈Ⅱ期前半併行) に比定したい。なお, 壺 (1) の口縁部内側稜線のみ異質であるが, 限定的な系譜は見いだせない (有飾壺で内側に折り返し技法を持つ東海東部系 (大郭式) にも類例はない)。柱状脚高坏は, 阿玉台北3期 (草刈編年では草刈Ⅲ期) の現象と捉えている。ところでA-7号墳は阿玉台北2期の竪穴住居跡を切っている。したがって上限で草刈Ⅱ期前半併行, 下限で草刈Ⅱ期後半併行という編年観が与えられるであろう。

⑦報告書 『阿玉台北遺跡』 財団法人千葉県都市公社 1975 (A 004号も同じ)

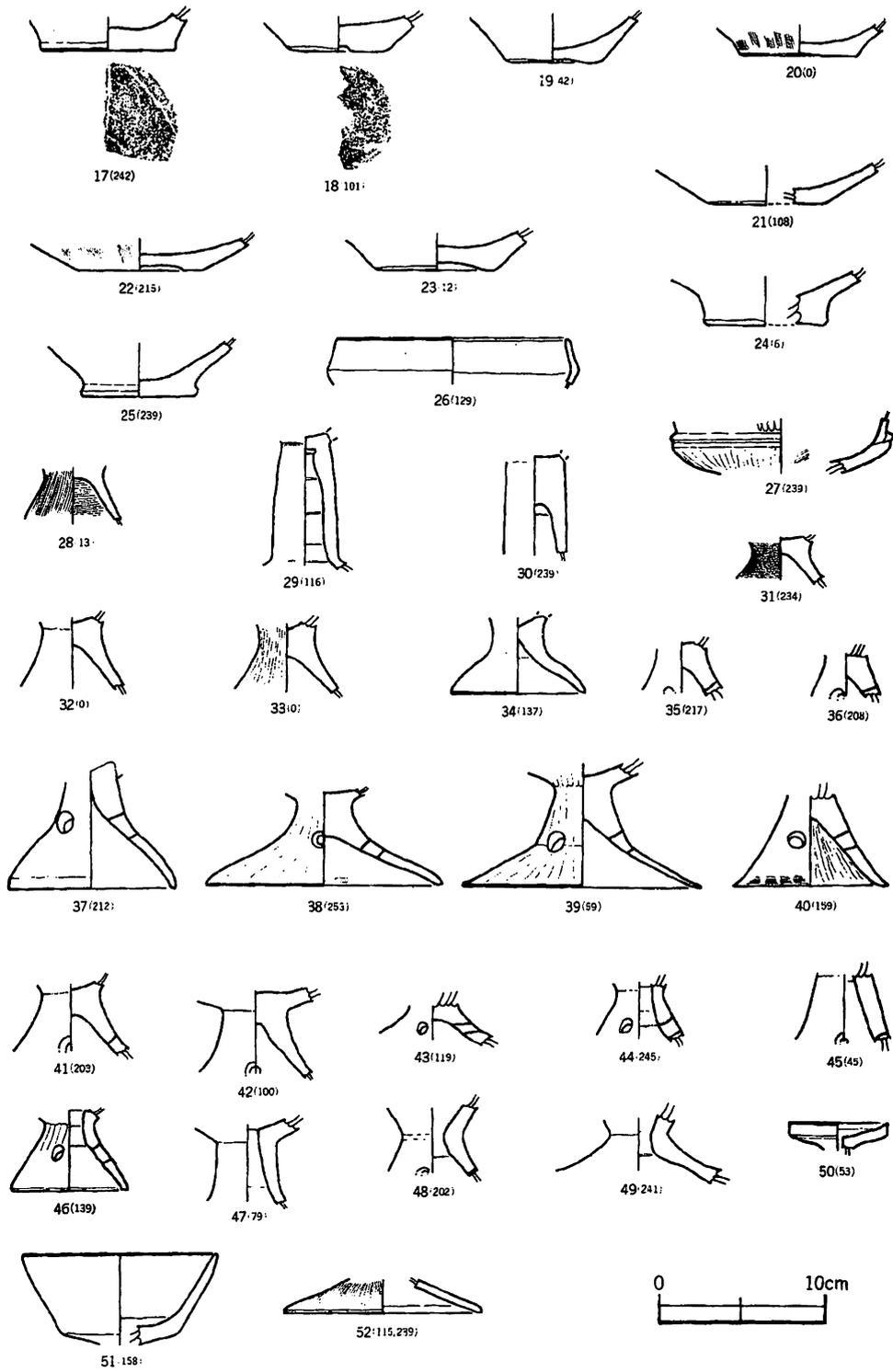


第193図 阿玉台北 A-7号墳・断面図



A地点 007号墳出土遺物実測図

第194図 阿玉台北 A - 7号墳出土遺物図(1)



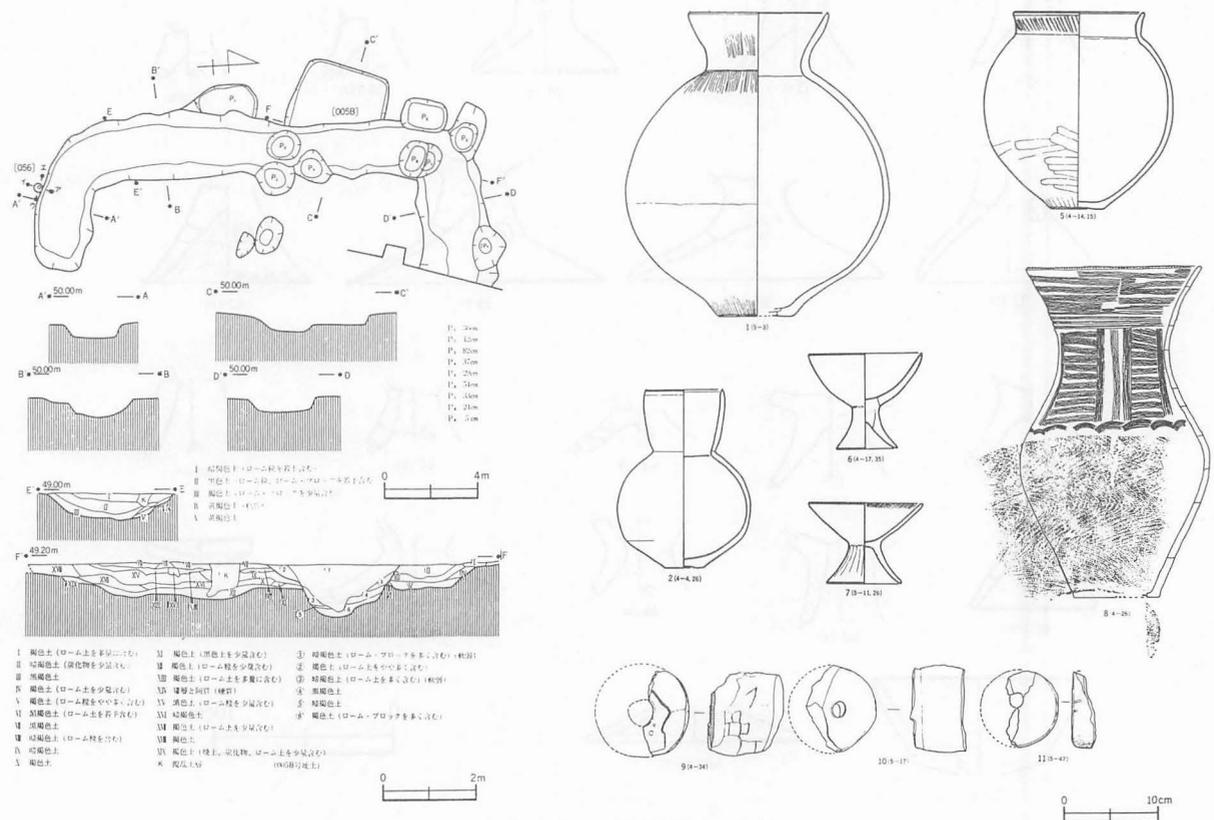
A地点 007号墳出土遺物実測図

第195図 阿玉台北 A - 7号墳出土遺物図(2)

78-(2) 阿玉台北 A 004号 (第196図) 草刈 I 期併行

- ②墳形 方墳(報告では溝状遺構)
- ③規模 西辺外縁18.5m
- ④墳丘 無し
- ⑤主体部 不明

⑥概要 阿玉台北 A 地点では前述した A-7号墳の周囲に近接して方墳が点在している。出土土器が縄文土器から古墳時代後期土師器まで混在しているため、時期決定が困難であるが、おおむね草刈 I 期の段階から A-7号を切る段階まで、すなわち草刈Ⅲ期あたりまで方墳が継続していたと考えられる。004号は出土遺物が豊富であるため掲示した。外径が18.5mと比較的大形と言え、現形状から判断すると陸橋付方墳とも考えられる。鉄宰等に伴う混入品も多いが、十王台式の共伴やひさご類形の埴の出土から、阿玉台北編年では草刈 I 期併行となる。本遺跡では弥生時代後期の確実な方形周溝墓と捉えられるものはなく、壺棺が検出されている。したがって004号はじめ草刈 I 期の段階での方形の溝状遺構は、いずれも方形周溝墓の系譜でない初現期の方墳と言える。



第196図 阿玉台北 A 004号平・断面図, 出土遺物図

79. 大日山（だいにちやま）1号墳（第197, 198図） 草刈Ⅱ期（前半）併行か

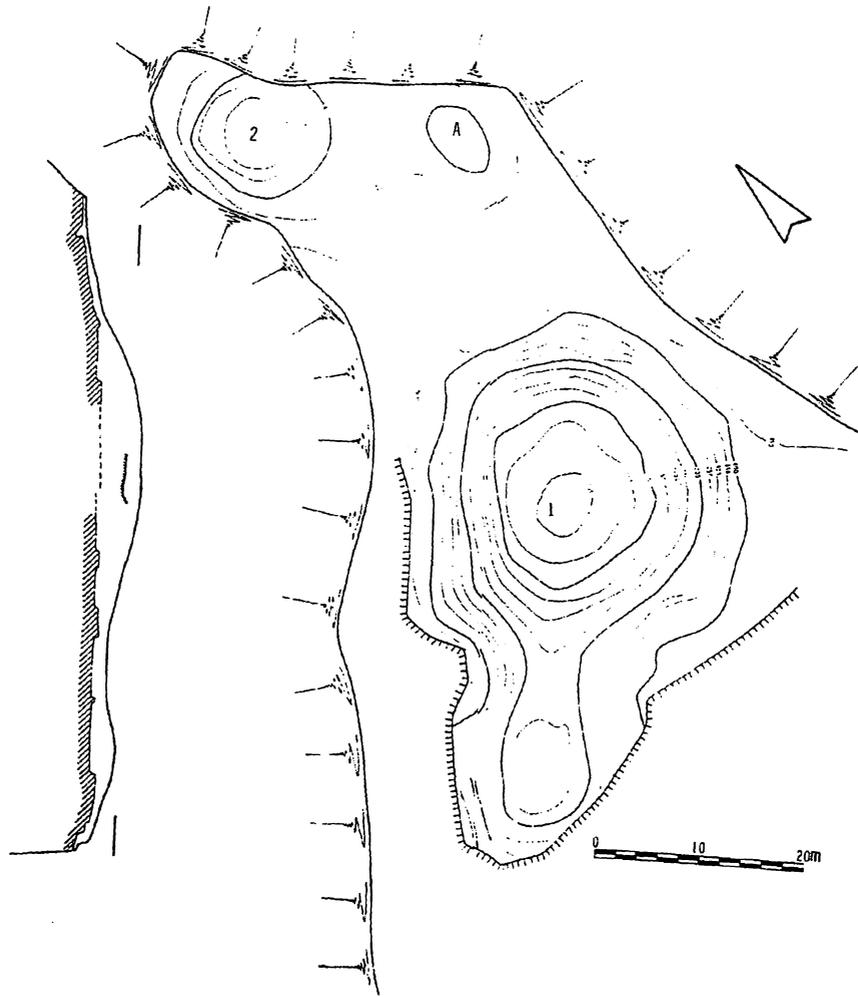
- ①所在地 香取郡下総町字高
- ②墳形 前方後円墳
- ③規模 全長54m, 後円径33m
- ④墳丘 有り, 後円部高さ5.5m（封土4m）
- ⑤主体部 木炭塚
- ⑥概要 眼下に利根川の沖積地を見下ろす標高30mの痩せ尾根（丘陵先端）に位置する。確認トレンチ及び主体部のみの調査である。図示できる土器が無いため、参考資料に近いが、編年的に極めて重要な位置にある古墳と言える。墳丘周囲地山が削平され、墳形を際立たせたと同時に、盛土や労働力の節約がなされたと言われている。周溝は確認されていないようである。地形に制約を受ける一方で、例えば台地先端の地形を利用したり、地山を削ったりして結果として、周溝が（一部しか）確認されない例は、出現期から前期古墳にしばしば見られ、椿3号墳や能満寺古墳にも共通している。さらに、出土遺物について、剣は「短剣」であり出現期古墳に多い。鉄斧の一部は類例が北ノ作1号墳（草刈Ⅱ期前半併行）にある。前方部墳丘がかなり低く全長も60m以下と小形であること、地山が削られていること、木炭塚であること等加えるとかなり古式の前方後円墳（神門形ではない定形化したもの）として良いのではないか。報告書では「封土中に多量の土器片が出土しており（略）地山を削った際に破壊された住居跡のものと考えられる」とされ、その住居跡は「十王台式に比定される弥生式土器から古墳時代初頭にかけて」と指摘された。その「古墳時代初頭」とされた土器群の型式的「下限」が重要な視点となることは言うまでもない。
- ⑦報告書 『千葉県香取郡下総町 大日山古墳』 千葉県教育委員会 1970

80. 堀籠浅間（ほうめせんげん）1号墳, 2号墳（第199図） 草刈Ⅱ期後半併行

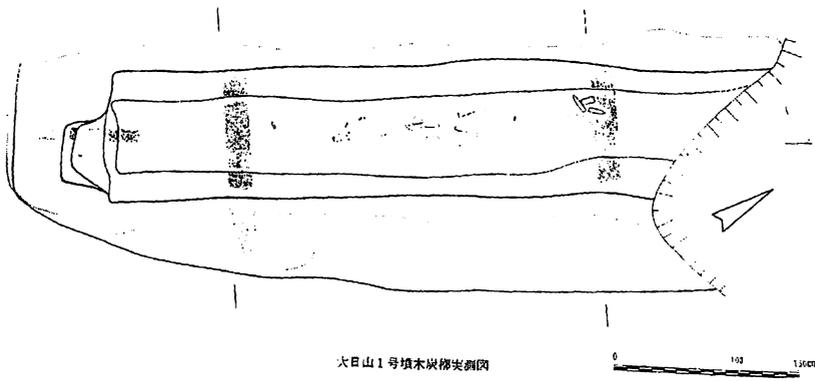
- ①所在地 香取郡大栄町堀籠字浅間
- ②墳形 1, 2号墳とも方墳
- ③規模 1号墳＝周溝内縁南北11.8m, 外縁15.2m, 東西もほぼ同様
2号墳＝周溝内縁南北8.6m, 外縁10.6m, 東西もほぼ同様
- ④墳丘 1号墳＝見かけの高さ約1m 2号墳＝見かけの高さ約2m
- ⑤主体部 1号墳＝土坑3基（内、周溝内1基） 2号墳＝土坑1基
- ⑥概要 大栄町の北東部、南北に伸びる台地の基部に、枝葉のように突き出た小さな台地先端に築かれている。2基は尾根上に55m離れ、位置している。1号墳には土坑が3基検出されたが、いずれも木炭、粘土等は見られず、素掘りである。周溝内土坑より4の壺が出土している。折り返し口縁と有段口縁が融合した姿相であり、阿玉台北編年や公津原編年でも最新期、草刈編年でもⅡ期後半からⅢ期に比定される。

ここでは周溝内土坑を追葬とした場合を前提に草刈Ⅱ期後半併行の編年観を与えておきたい。2号墳出土の土器は小形高坏もしくは器台と底部穿孔の有段口縁壺2個体である。周溝コーナーから出土した。有段口縁壺は頸部が幅広で短く、作りも雑である。1号墳と同様草刈Ⅱ期後半としておきたい。

- ⑦報告書 『堀籠浅間古墳』堀籠浅間古墳群調査会 1984

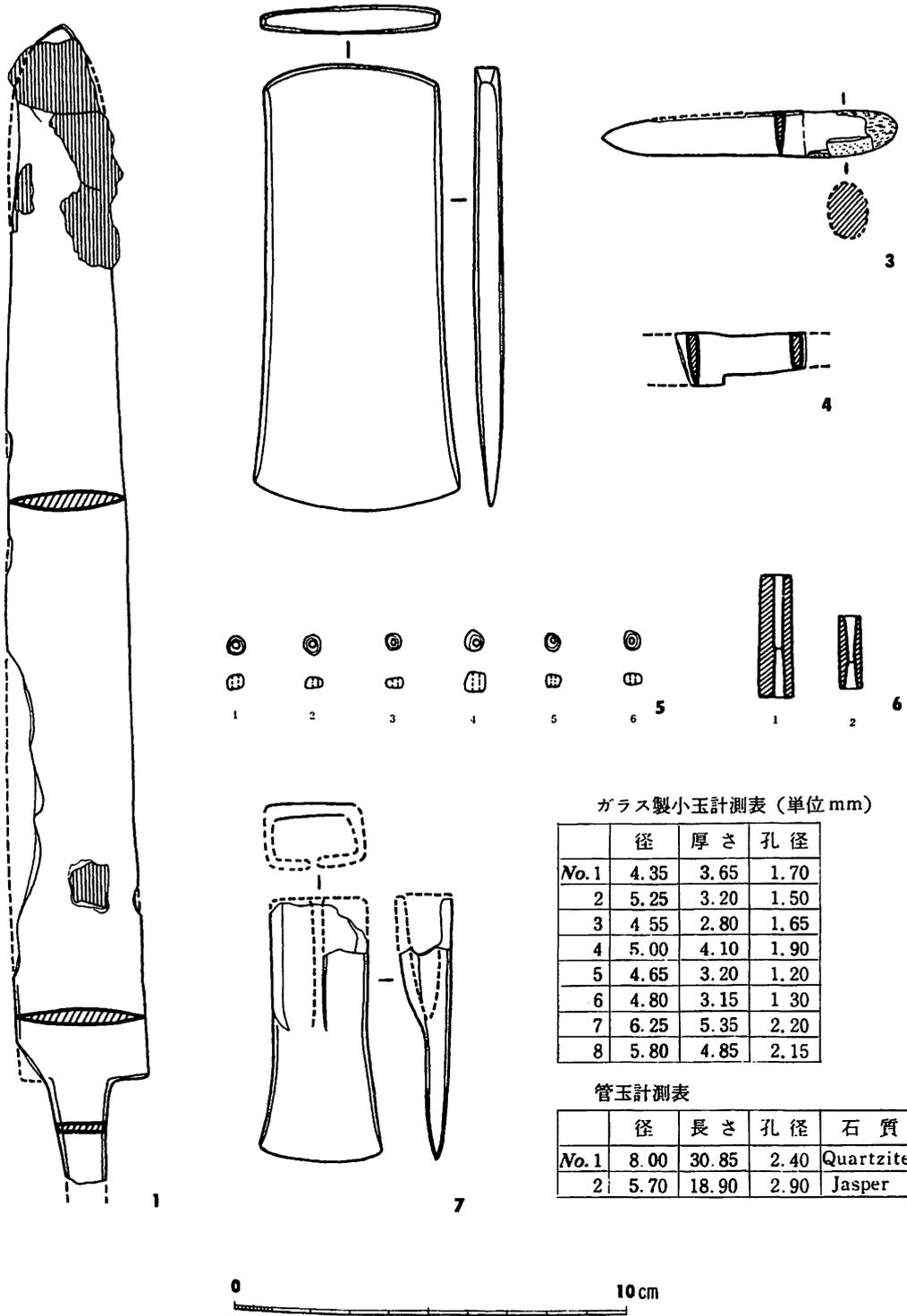


大日山古墳 1、2号墳
墳丘実測図



大日山1号墳木炭梯実測図

第197図 大日山1号墳平・断面図，主体部図



ガラス製小玉計測表 (単位 mm)

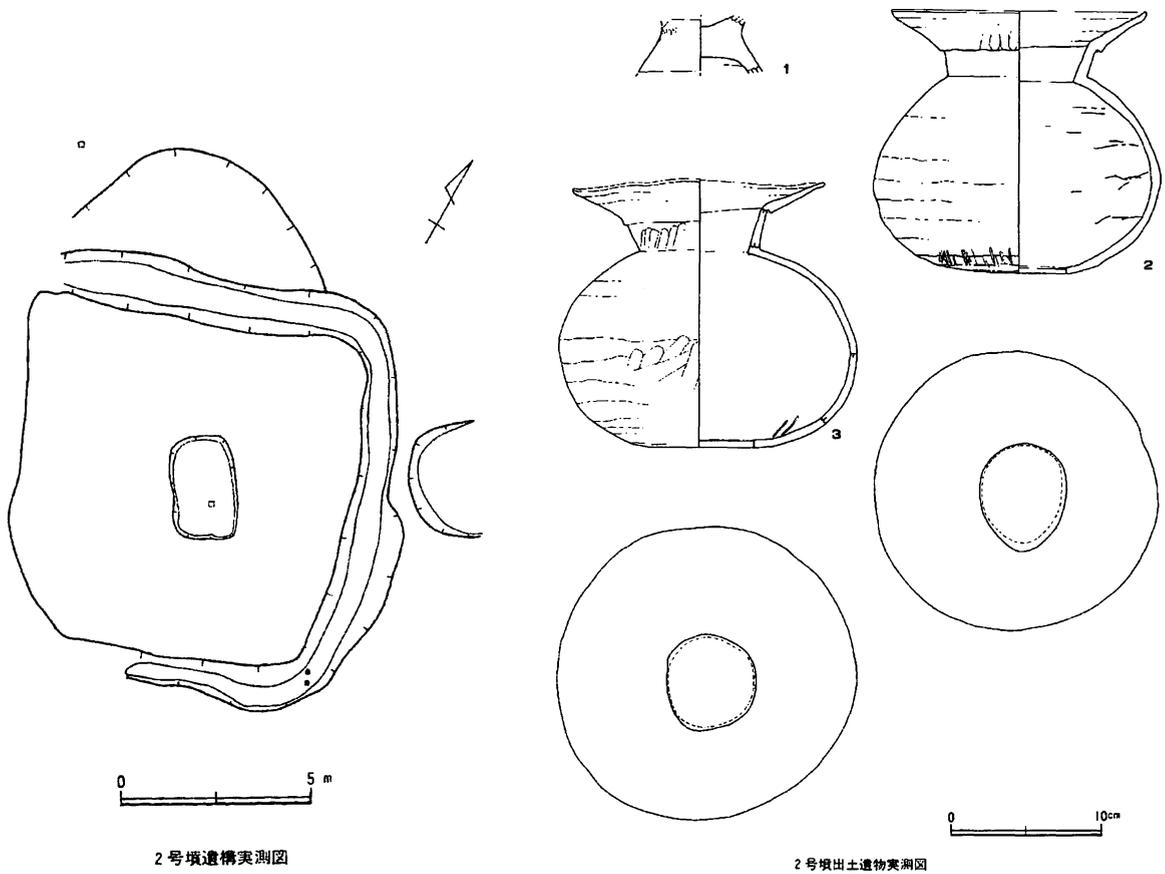
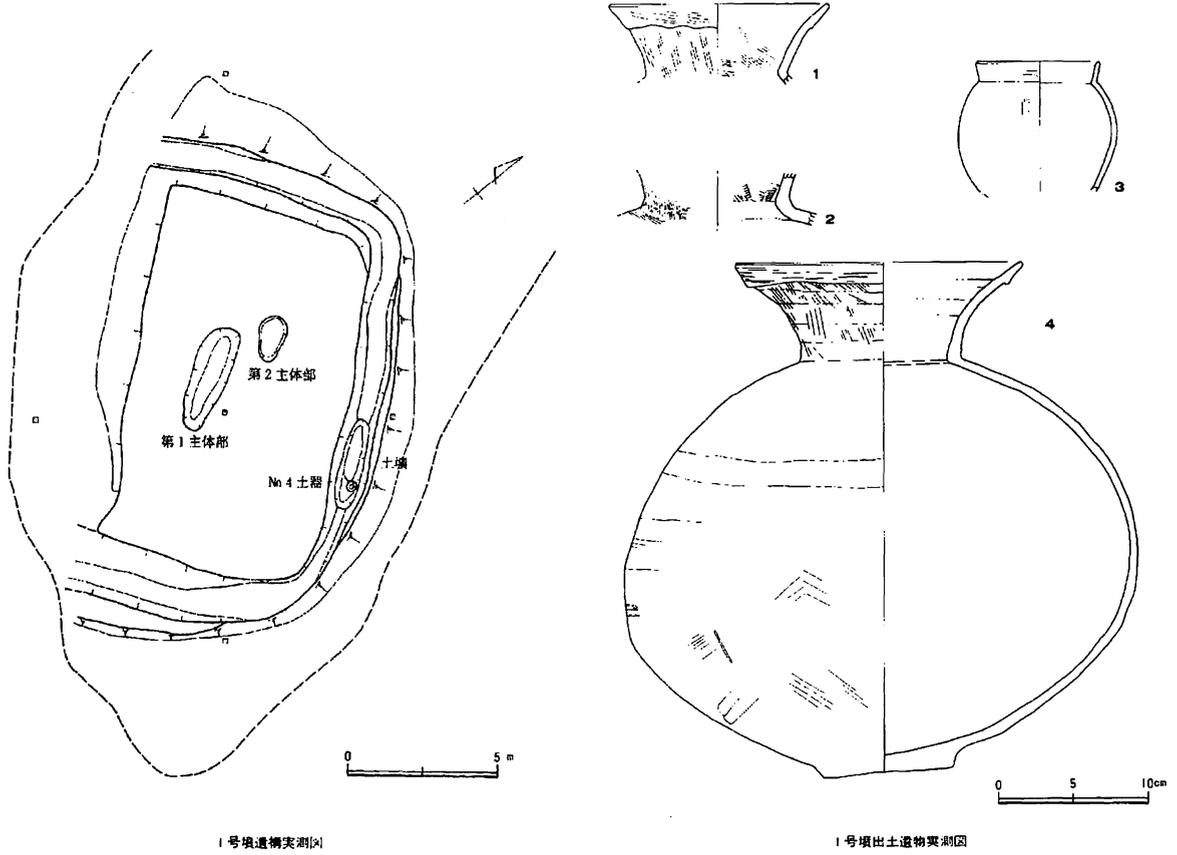
	径	厚さ	孔径
No.1	4.35	3.65	1.70
2	5.25	3.20	1.50
3	4.55	2.80	1.65
4	5.00	4.10	1.90
5	4.65	3.20	1.20
6	4.80	3.15	1.30
7	6.25	5.35	2.20
8	5.80	4.85	2.15

管玉計測表

	径	長さ	孔径	石質
No.1	8.00	30.85	2.40	Quartzite?
2	5.70	18.90	2.90	Jasper

大日山1号墳出土遺物 (1~6木炭椀、7墳丘くびれ部)

第198図 大日山1号墳出土遺物図



第199図 堀籠浅間1号, 2号平面図, 出土遺物図

81. 大戸天神台（おおどてんじんたい）古墳（第200図） 参考資料

- ①所在地 佐原市大戸字天神台
 ②墳形 前方後円墳
 ③規模 全長62m, 後円部径33.5m, 前方部長28.5m, 前方部幅22.5m, くびれ部幅16.2m（復元値）
 ④墳丘 有り
 ⑤主体部 不明
 ⑥概要 台地突端を刻む谷によって区切られた舌状地形を最大限に利用して築かれた前方後円墳である。墳丘は比較的良好に残るが、後円部東側から前方部北側隅角にかかる裾部、後円部南側裾部をはじめ、所々改変されている。古墳は後円部を最高所として緩やかに北側に傾斜する台地先端の地形を利用し前方部に向かって低くなっている。後円部径と前方部長の主軸上の比率は6:5であり、前方部が長く長く伸びる特徴を持つ。つまり、房総中部から南部の大型前方後円墳に採用される後円部が大きく前方部が短小な墳形とは大きく異なっている。
 ⑦報告書 萩原恭一, 白井久美子「佐原市大戸天神台古墳測量調査報告」『千葉県史研究』第7号
 1999

82. 山之辺手ひろがり（やまのべてひろがり）3号墳（第201図） 参考資料 中期

- ①所在地 佐原市山之辺へたの前
 ②墳形 長方墳
 ③規模 20×14m
 ④墳丘 有り
 ⑤主体部 木棺直葬4
 ⑥概要 墳頂部に4つの主体部があったとされるが、本報告書未刊のため詳細は不明である。遺物は石枕, 立花, 三環鈴, 鉄鏃, 玉類が出土している。
 ⑦報告書 『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅱ』 佐原市教育委員会 1987

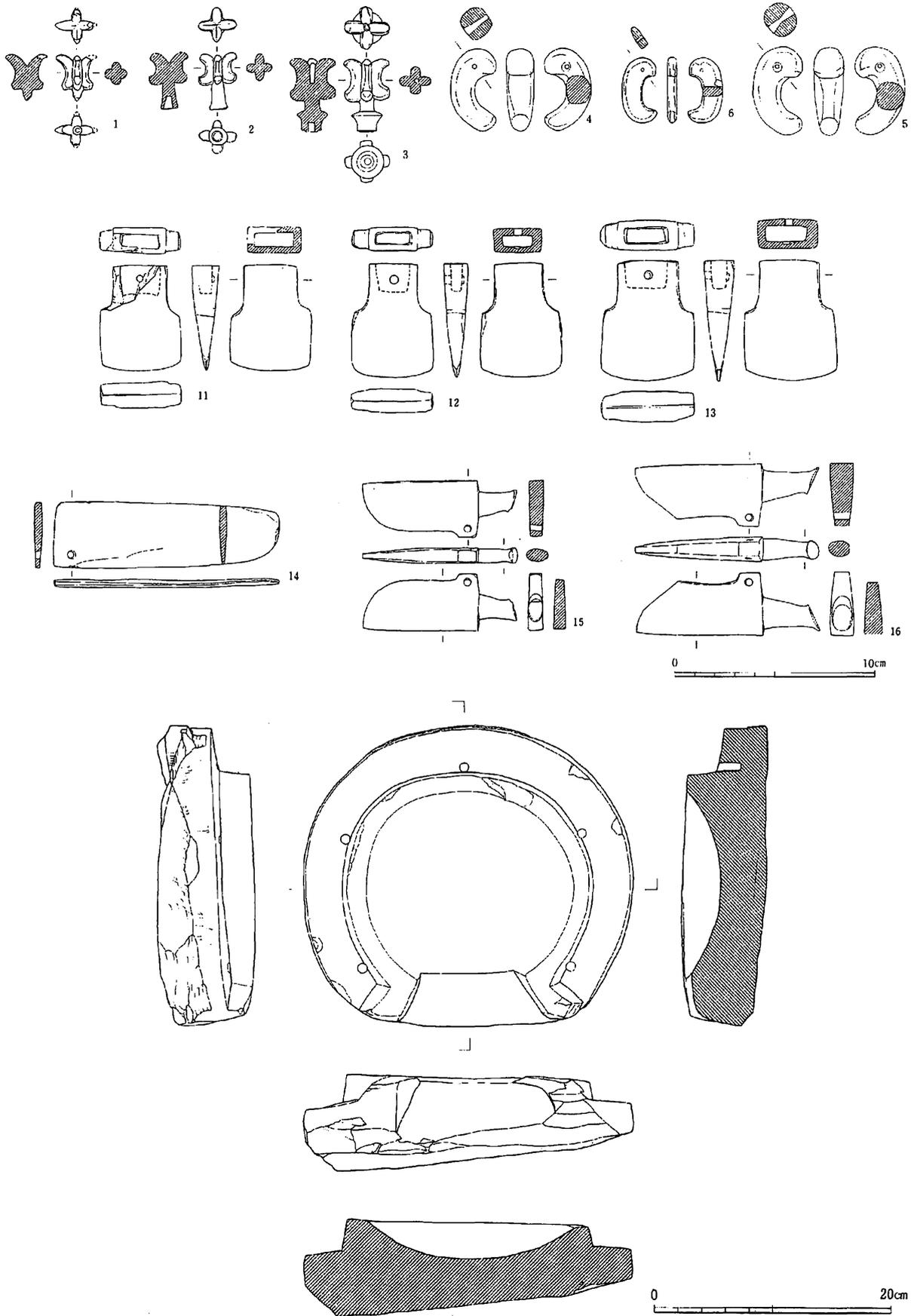
83. 三之分目大塚山（さんのわけめおおつかやま）古墳（第202図） 参考資料 中期

- ①所在地 香取郡小見川町三之分目字大塚
 ②墳形 前方後円墳
 ③規模 全長118m, 後円部径67m, 前方部幅60m
 ④墳丘 有り, 後円部高さ9.5m前方部高さ7.5m
 ⑤主体部 不明
 ⑥概要 黒部川と利根川の分岐する標高4mの低地に位置する前方後円墳である。墳丘は南側半分を削平されているが3段築成であり、墳丘端, 中段, 下段部テラス端の三重に埴輪列が巡っていたと推測される。また、後円部頂には長持形石棺と思われる部材が残っており、畿内的な主体部を採用していることが注目される。遺物は主に円筒埴輪であり、若干ではあるが朝顔形埴輪もみられる。これらは茨城県舟塚山古墳が最も近く類似性が強い。大塚山古墳との相違点は、基部の成形技法, 板状工具の使用の有無が挙げられる。5世紀中葉頃に比定され、出土埴輪は千葉県で最も古い埴輪とされた。
 ⑦報告書 『三之分目大塚山古墳発掘調査報告書』 小見川町教育委員会 1987

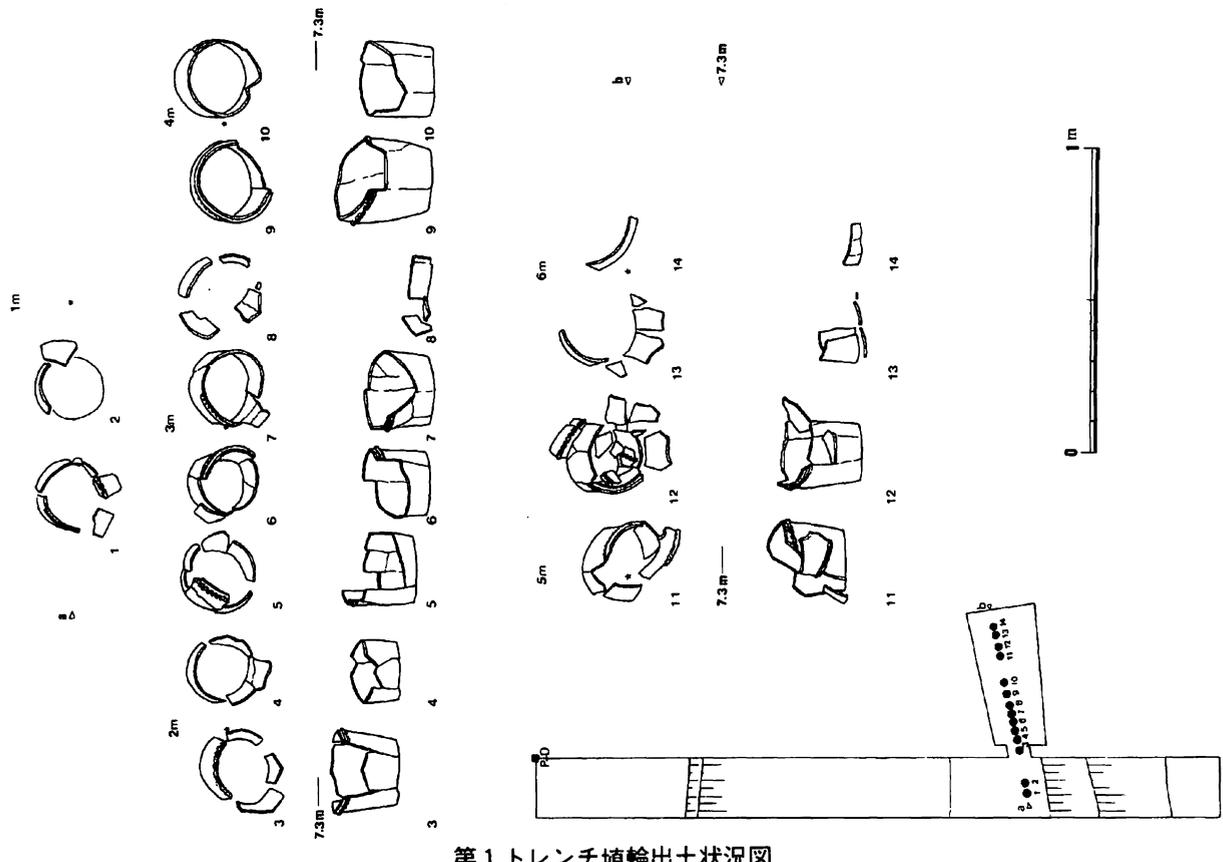
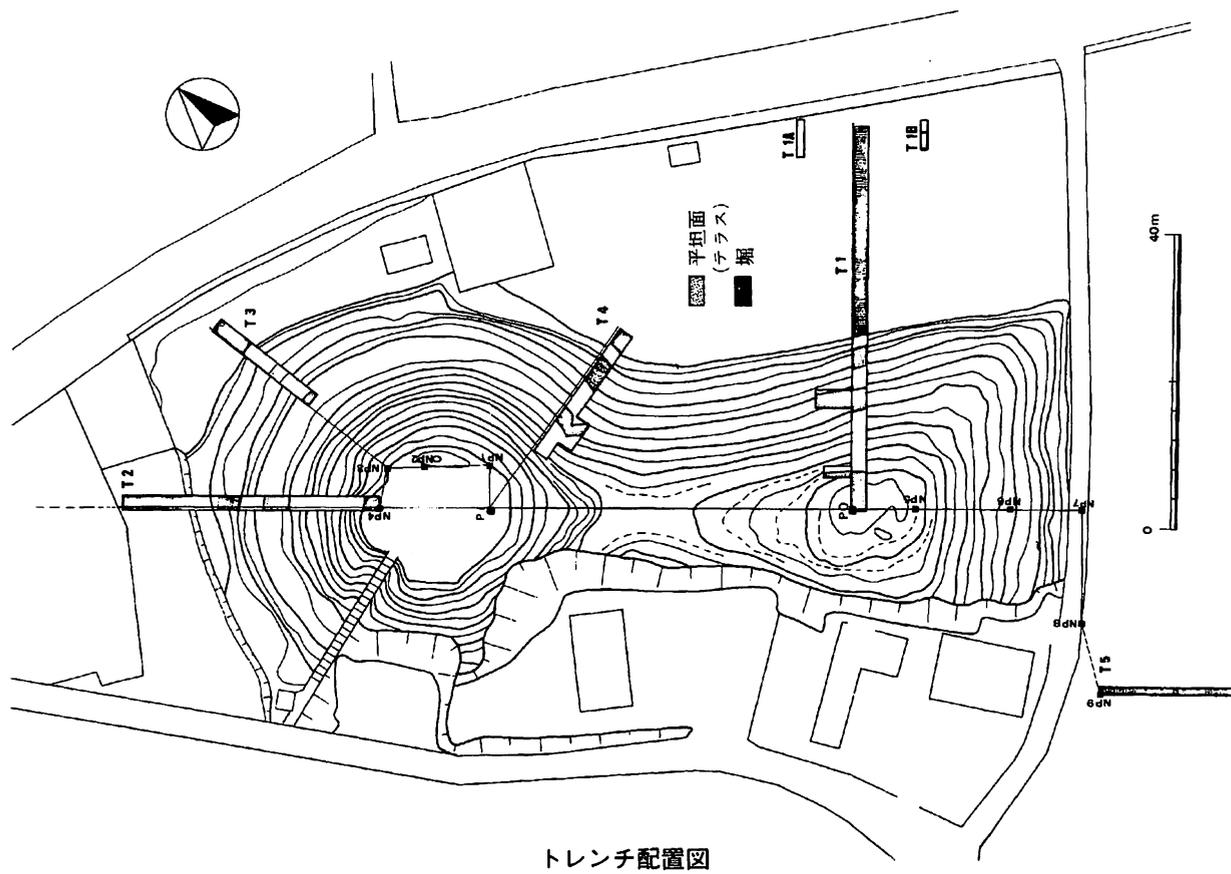


佐原市大戸天神台古墳測量図

第200図 大戸天神台古墳測量図



第201図 山之辺手ひろがり3号墳出土遺物図



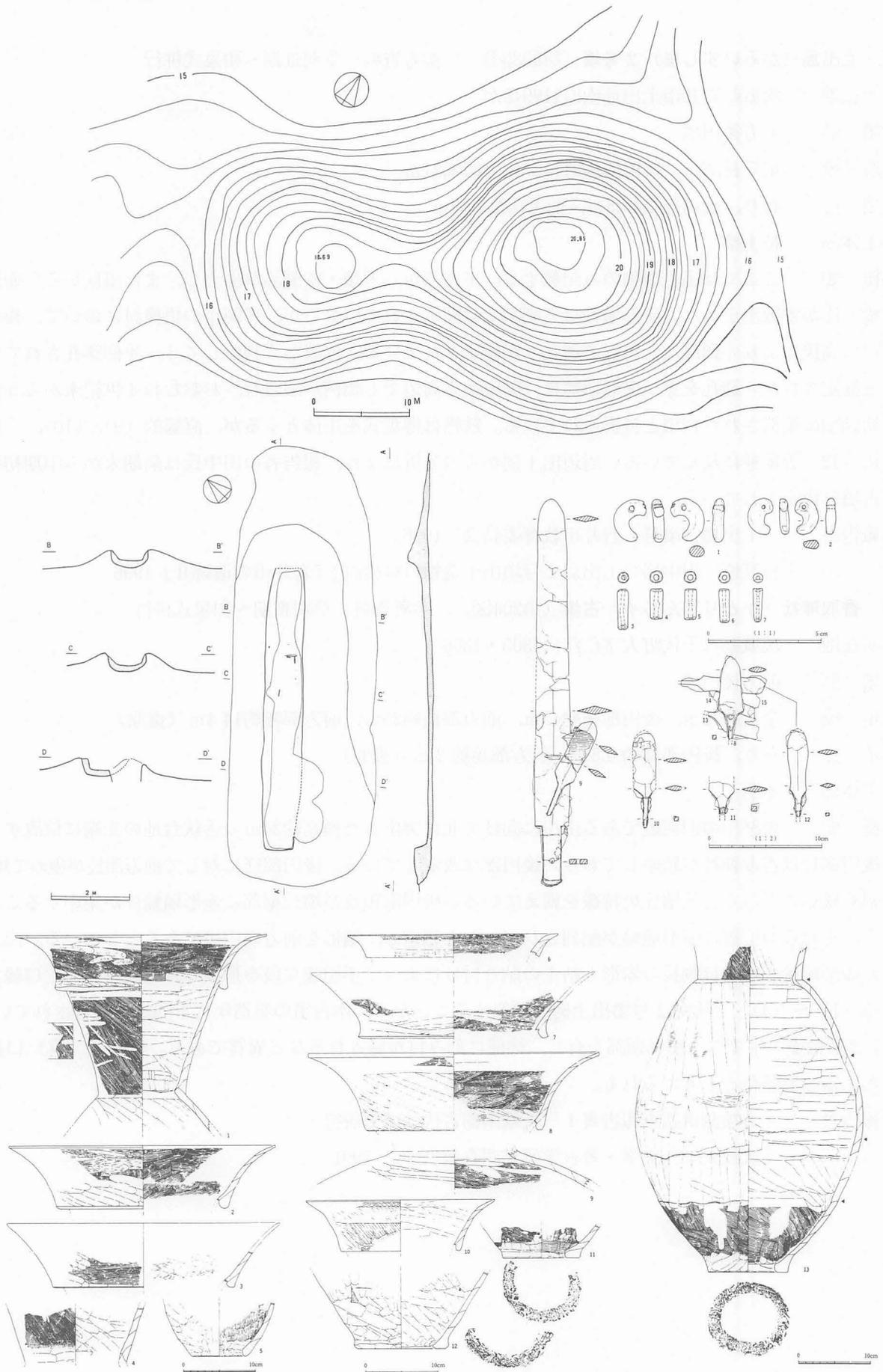
第202図 三之分目大塚山古墳測量図, 出土遺物図

84. 上出島(かみいずしま) 2号墳(第203図) 参考資料 草刈Ⅲ期～和泉式併行

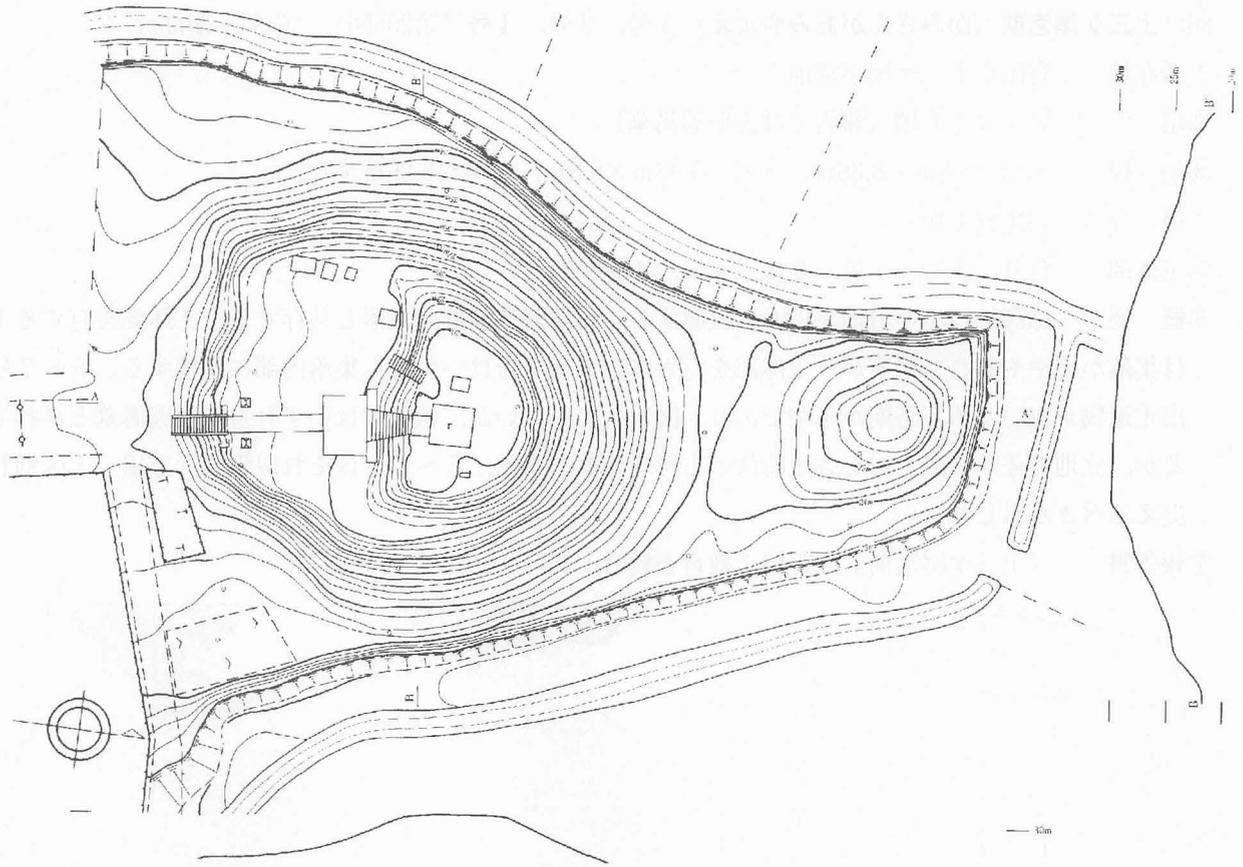
- ①所在地 茨城県岩井市上出島南原1199ほか
- ②墳形 前方後円墳
- ③規模 墳丘長56m, 後円部径31m, 前方部幅21m
- ④墳丘 有り, 後円部高4.85m, 前方部高2.69m
- ⑤主体部 粘土槨
- ⑥概要 ここでは出土遺物のみ記載する。主体部から玉類・鉄製品が出土し, また墳丘から「壺形埴輪」片が多数出土した。壺形埴輪は実測図では図示されていないが, 1996年の再検討において, 報告者の日高氏により「頸部に三角形の透孔」が確認されている。位置から判断して3～4個穿孔されていたと推定された。透孔を穿つ壺形埴輪は, 関東地方周辺でも類例が限られ, おおむね4世紀末から5世紀初頭頃に築造された古墳と分析されている。鉄鏃は柳葉式を主体とするが, 直線的(9), (10), くびれ状(12)等多種に及んでいる。周辺出土例からの分析により, 報告者の田中氏は前期末から中期初等の古墳に比定されている。
- ⑦報告書 『上出島古墳群』岩井市教育委員会 1976
日高慎, 田中裕「上出島2号墳出土遺物の再検討」『岩井市の遺跡Ⅱ』1996

85. 香取神社(かとりじんじゃ)古墳(第204図) 参考資料 草刈Ⅲ期～和泉式併行

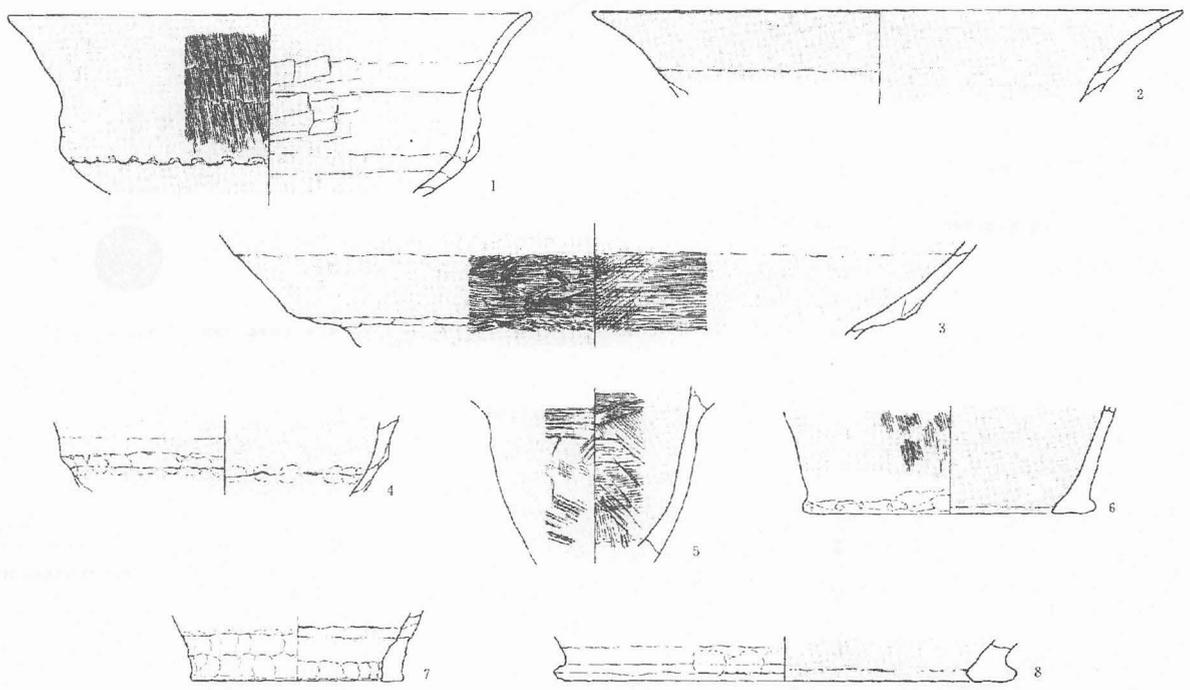
- ①所在地 茨城県八千代町大字仁江戸1305・1306
- ②墳形 前方後円墳
- ③規模 全長約70m, 後円部径約45m, 前方部長約25m, 前方部幅約14.4m(復原)
- ④墳丘 有り, 後円部高約5.5m, 前方部高約2m(復原)
- ⑤主体部 不明
- ⑥概要 鬼怒川の旧河道である山川に向けて北に突出した標高約24mの舌状台地の先端に位置する。後円部には香取神社が鎮座しており, 後円部は改変している。後円部径に対して前方部長が極めて短く, 幅も狭いことから古式墳丘の特徴を備えている。後円部頂及び墳丘裾部に壺形埴輪片が集中することから, それらの位置に壺形埴輪が配列されていたと想定し, 墳形を前方後円墳であるとしている。出土した壺形埴輪の特徴は胴長の器形と粘土の貼り付けによって不明瞭な段を形成した有段(二重)口縁である(1)～(4)。上出島2号墳出土例と類似することから, 本古墳の築造年代も同様と報告されている。1は埴輪壺の中でも下膨れ頸部を有し, 端部に刻み目が施されるなど異質である。有段(二重)口縁壺形土器の形骸化とも考えられる。
- ⑦報告書 「古墳測量調査報告書Ⅰ－茨城南部古代地域史研究－」
『筑波大学先史学・考古学研究調査報告5』1991



第203図 上出島2号墳測量図，主体部図，出土遺物図



香取神社古墳丘陵測量図



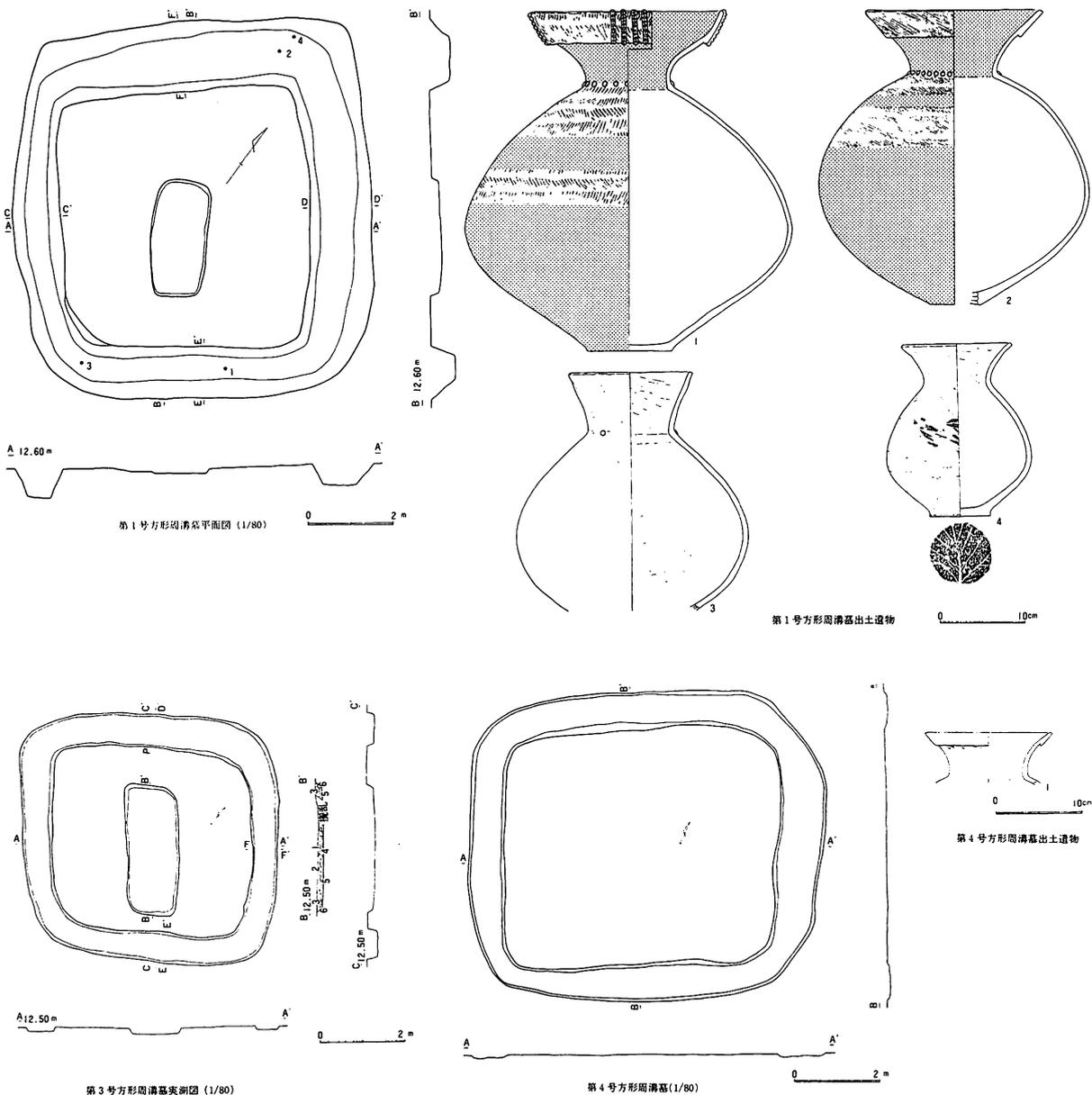
香取神社古墳表面採集遺物実測図

第204図 香取神社古墳測量図, 出土遺物図

86. 上三ヶ尾宮前（かみさんがおみやまえ）1号，3号，4号（第205図） 草刈I期併行

- ①所在地 野田市上三ヶ尾字宮前
- ②墳形 いずれも方墳（報告では方形周溝墓）
- ③規模 1号=8.8m×8.36m，3号=5.98m×5.8m，4号=8.26m×7.27m
- ④墳丘 いずれも無し
- ⑤主体部 有り，1号=土坑，3号=土坑，4号=無し
- ⑥概要 標高約12mの台地平坦面に位置する。古墳時代前期の集落と共存する。主体部を有する1号は集落からやや離れているが，主体部を有さない5～7号はいずれも集落内部に立地する。5～7号は出土遺物が無いため，時期が不明であり，図示していないが，報告ではいずれも方形周溝墓とされているが，立地の差から，1号を弥生時代の方形周溝墓の系譜，5～7号はそれ以降の「方墳」と区別して捉えるべきかもしれない。

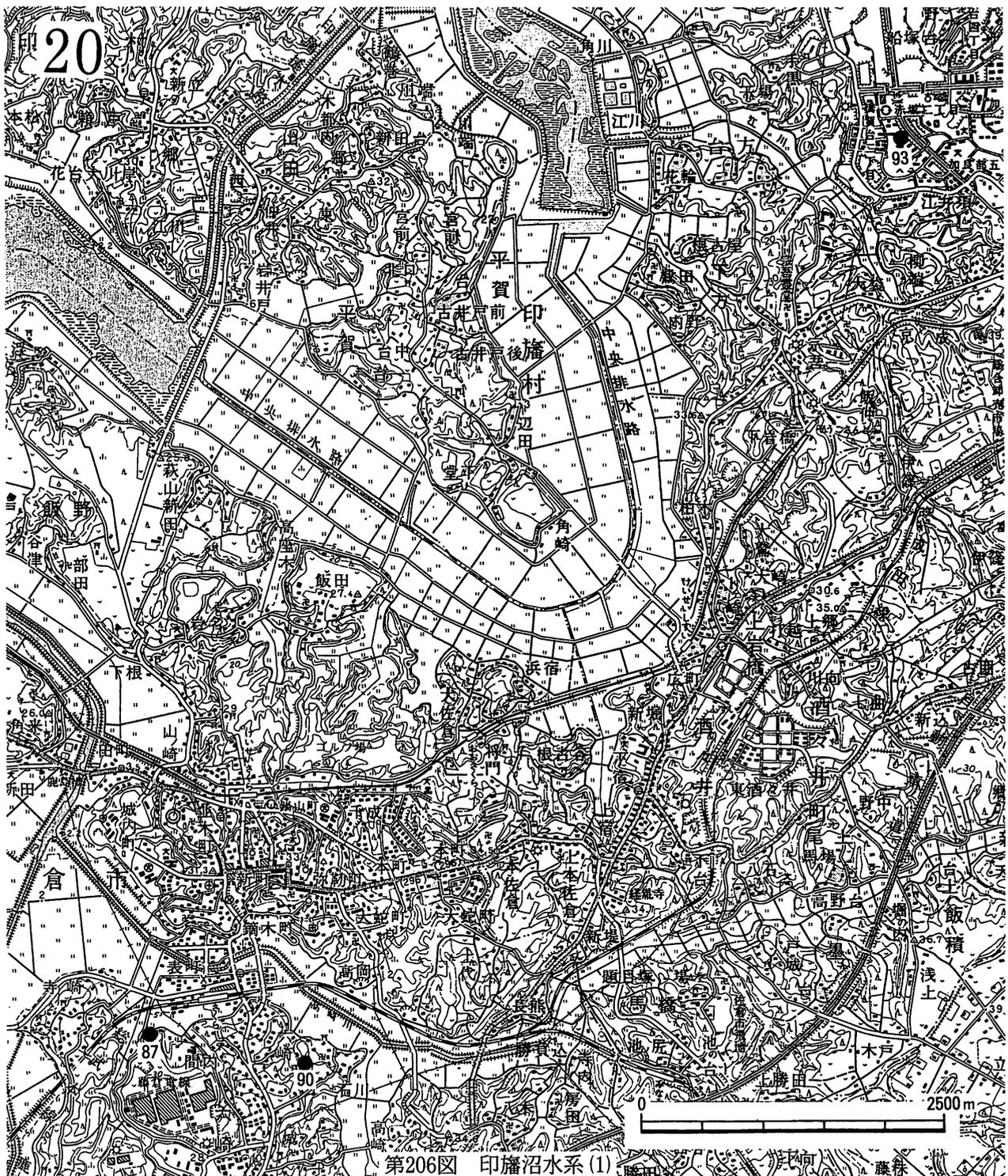
⑦報告書 『上三ヶ尾宮前』 野田市教育委員会 1991



第205図 上三ヶ尾1号，3号，4号平・断面図，出土遺物図

第9節 印旛沼水系

印旛沼周辺は現茨城県地方との接触で、独特の小地域性を生み出している。特に弥生時代後期において臼井南遺跡を指標とした土器型式が設定され、その後の古墳発生時期においても、特異な遺跡が存在する。例えば大崎台遺跡においては、他地域に無いほど畿内系譜の強い土器群が出現しているし、臼井南遺跡では東海地方西部、伊勢湾周辺からの搬入土器が目立っている。印旛沼と東京湾の間には分水界（太平洋—東京湾分水界）が存在しているが、新川（旧江戸川）、花見川を通じて東京湾にも通じていた可能性もあり、北方及び西方文化の融合地域として位置づけられていたと考えられる。



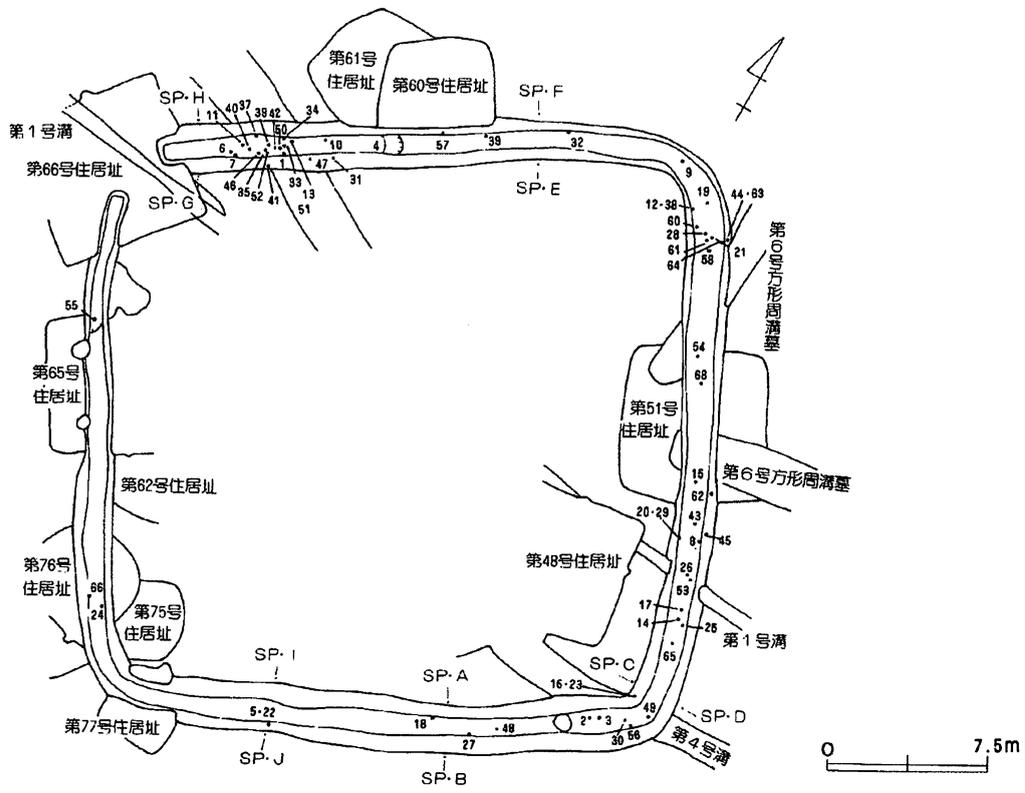
87- (1) 大崎台(おおさきだい) 第13号(第208, 209図) 草刈I期併行

- ①所在地 佐倉市六崎字大崎台(9号~12号も同じ)
- ②墳形 陸橋付方墳(報告では方形周溝墓)
- ③規模 台状部で東西25.1m, 南北22.8m, 外周を含めると東西28.2m, 南北27.2mを測る
- ④墳丘 無し
- ⑤主体部 不明
- ⑥概要 標高約30mの沖積世台地上にある。弥生時代中期から古墳時代にかけて、環壕集落を含む大遺跡である。方墳は台地北端の中央部から西寄りに単独で存在する。北周溝の中央からやや西寄りに一段低く階段状に掘り下げられている部分があり、比高差0.21mを測る。ここに器台、高坏等の土器が豊富に出土しており、祭祀等の場に関連するものとして注目される。陸橋部は北東コーナーに当たる部分の地山を掘り残して設けており、幅2.3mを測る。私見では出土土器に3つの系譜を想定している。一つはタタキ甕等に見られる庄内式初期の系譜である((5), (6)等)。但し口唇部は丸められ、上総地方に共通する新相の要素も見られる。一方で頸部に輪積痕が残るもの(9, 11等)があり、結論を言えば、上総南部の平底甕を基盤に、庄内式初期の系譜が強く影響した例と考えておきたい。二つめは、内湾脚高坏(42), (43)等に見られる東海地方西部系(廻間I式~II式頃)、三つめは特殊器台(埴結合器台)(61)の北陸系である。また、小形器台は器受部が直線的で、口唇部が直立気味で凹線が入るもの(50)~(53)は東海西部もしくは北陸地方の両者が想定できる。このように13号出土品は在地系を見出すのが難しく、庄内式、廻間式の編年観を考えると草刈I期に比定できようか。
- ⑦報告書 『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1987
(9号~12号も同じ)

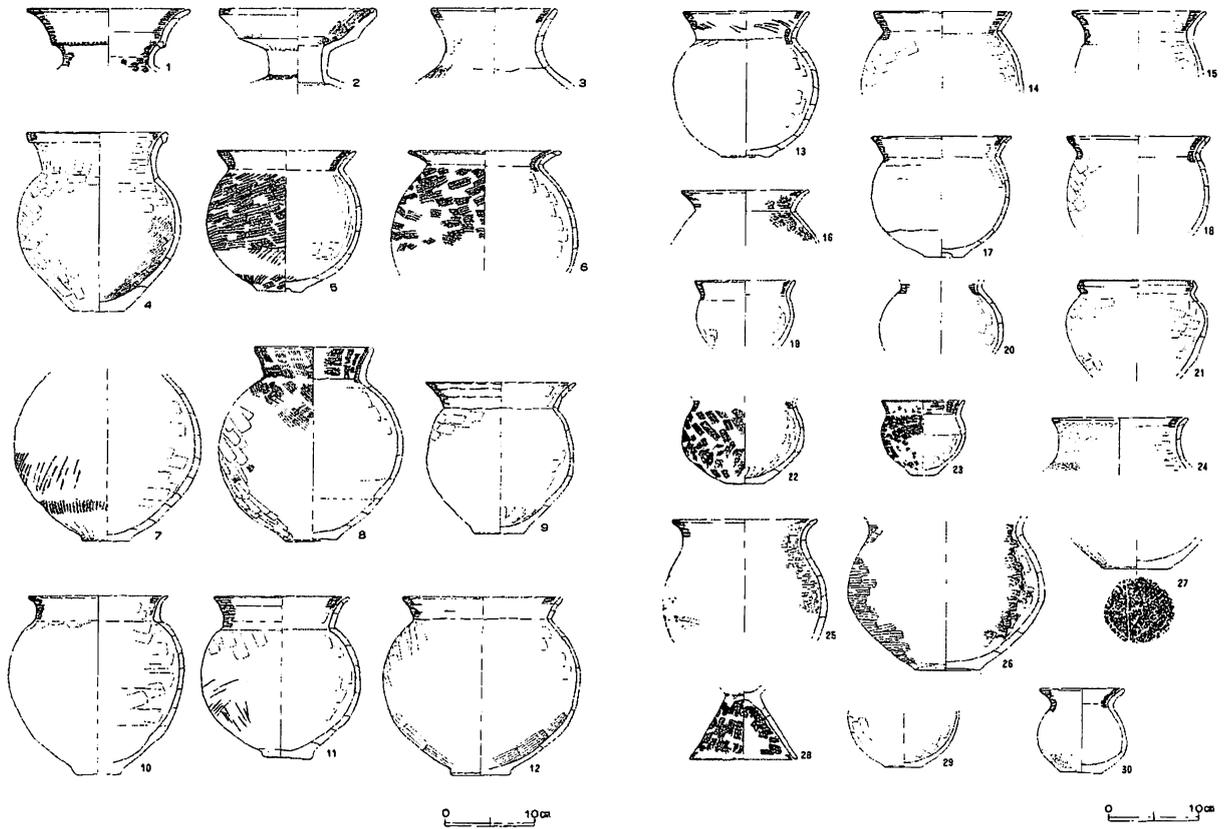
87- (2) 大崎台第9号~12号(第210図) 草刈I期併行

- ②墳形 いずれも方墳(報告では方形周溝墓)
- ③規模 外縁9号=14.4m×13.2m 10号=15.88m×14.4m
11号=8.3m×9.5m 12号=16.05m×14.08m
- ④墳丘 いずれも無し
- ⑤主体部 9号, 10号=土坑, 11号, 12号=不明
- ⑥概要 大崎台遺跡における方形周溝墓は、弥生後期の段階では中央主体部を有する周溝四隅が切れたものが存在する。これらはしかし、群を形成していない。その後、草刈I期併行の段階で畿内系土器を伴う四隅の切れないものが出現していく(方墳)。9号~11号は近接(9, 10号は周溝を共有)して出現する。そしてほぼ同じ頃、北側の離れた箇所に25mを越える13号が登場する。9号からは畿内、もしくは北陸系譜と思われる装飾壺、10号からはタタキ甕に短剣が出土し、共に中央主体部を有している。これに対し12号は在地系土器が見られ、また、周溝の一部が切れる形状であり、中央主体部が確認できず南側に単独で立地する。時期的にはいずれも草刈I期に併行するが、内容、立地面で様々に異なり、当時の複雑な墓制の具現化した姿が看取される。

第2章 前期古墳等の概要



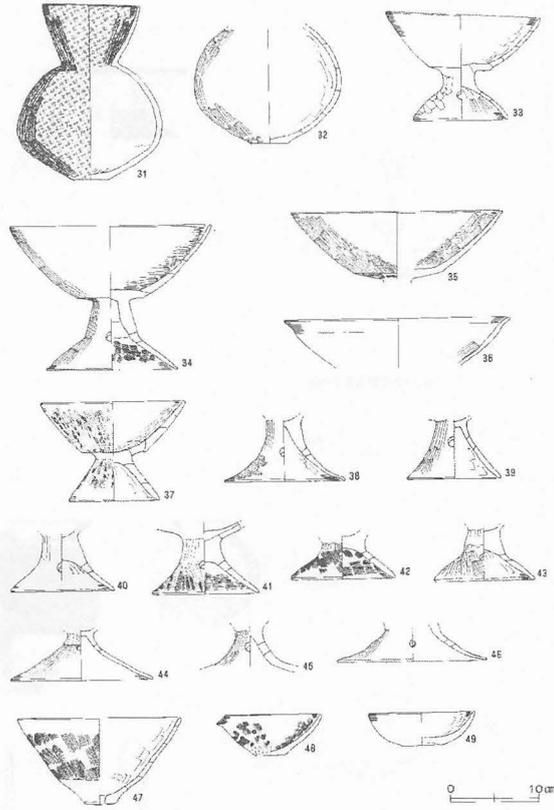
第13号方形周溝墓実測図



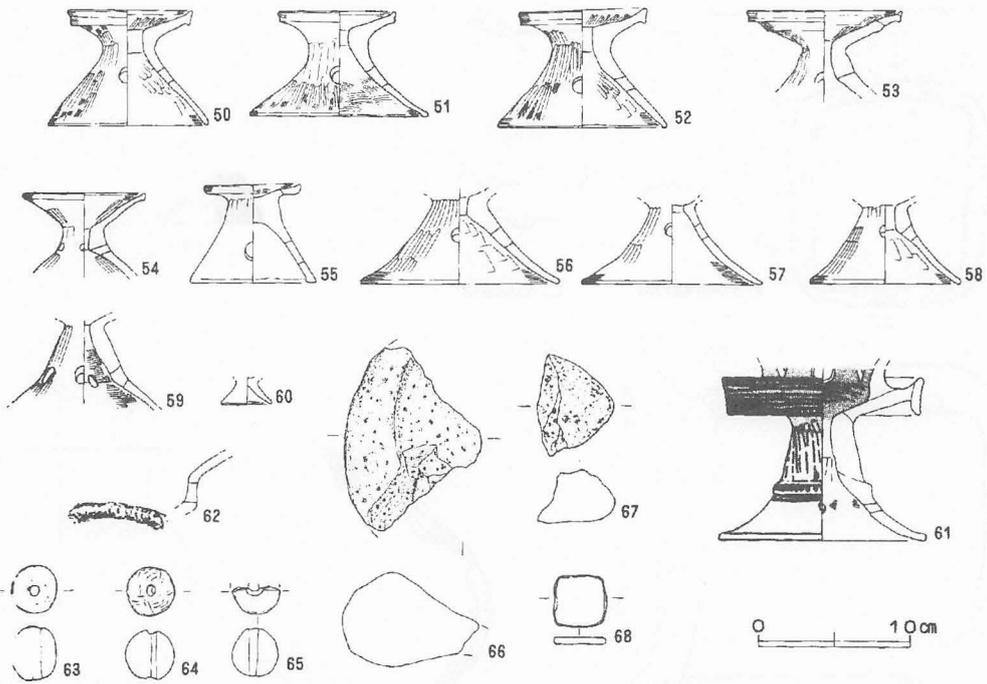
第13号方形周溝墓出土遺物①

第13号方形周溝墓出土遺物②

第208図 大崎台第13号平面図，出土遺物図(1)



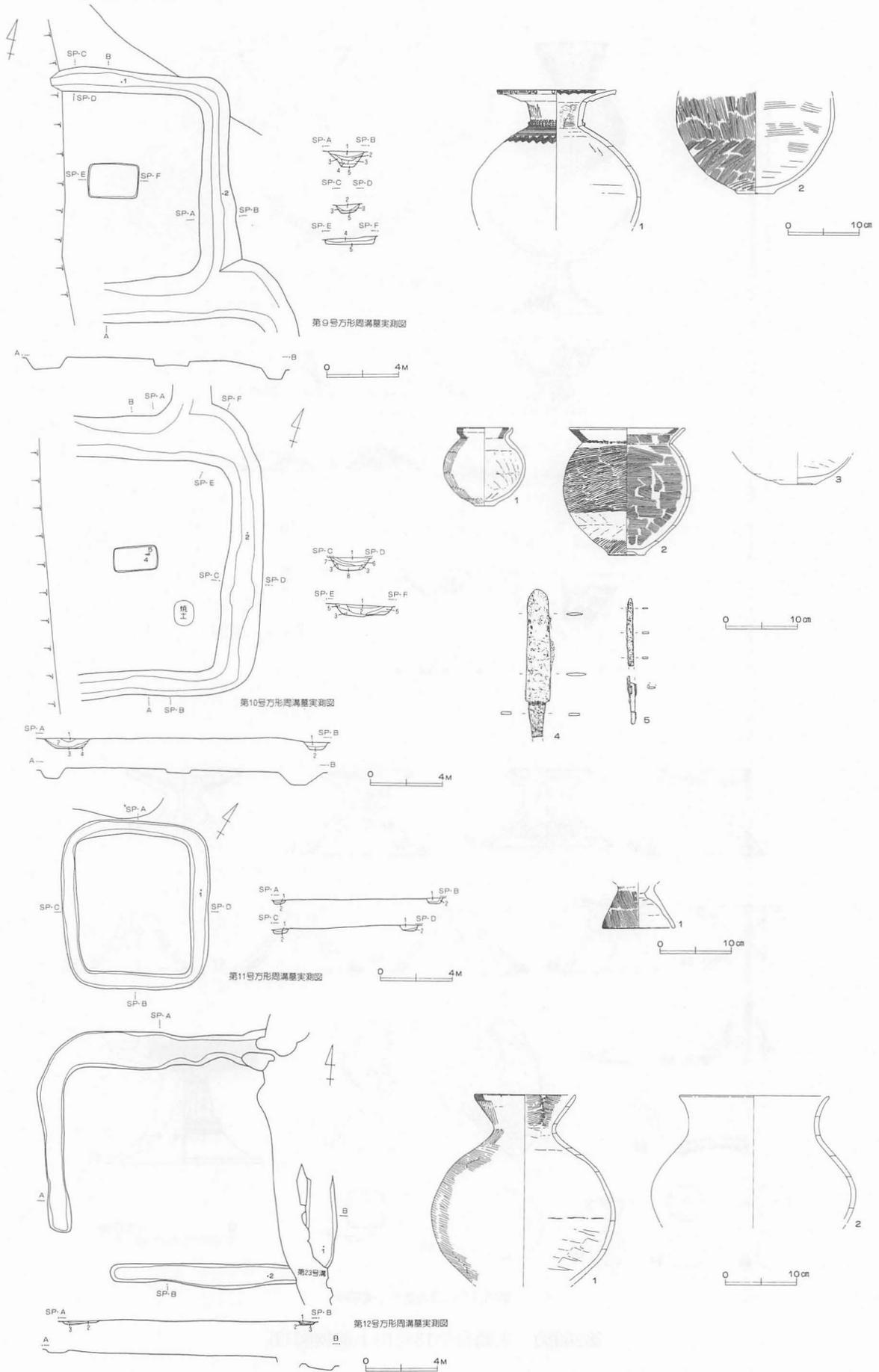
第13号方形周溝墓出土遺物(3)



第13号方形周溝墓出土遺物(4)

第209图 大崎台第13号出土遺物图(2)

第2章 前期古墳等の概要



第210図 大崎台第9号~12号平面図，出土遺物図

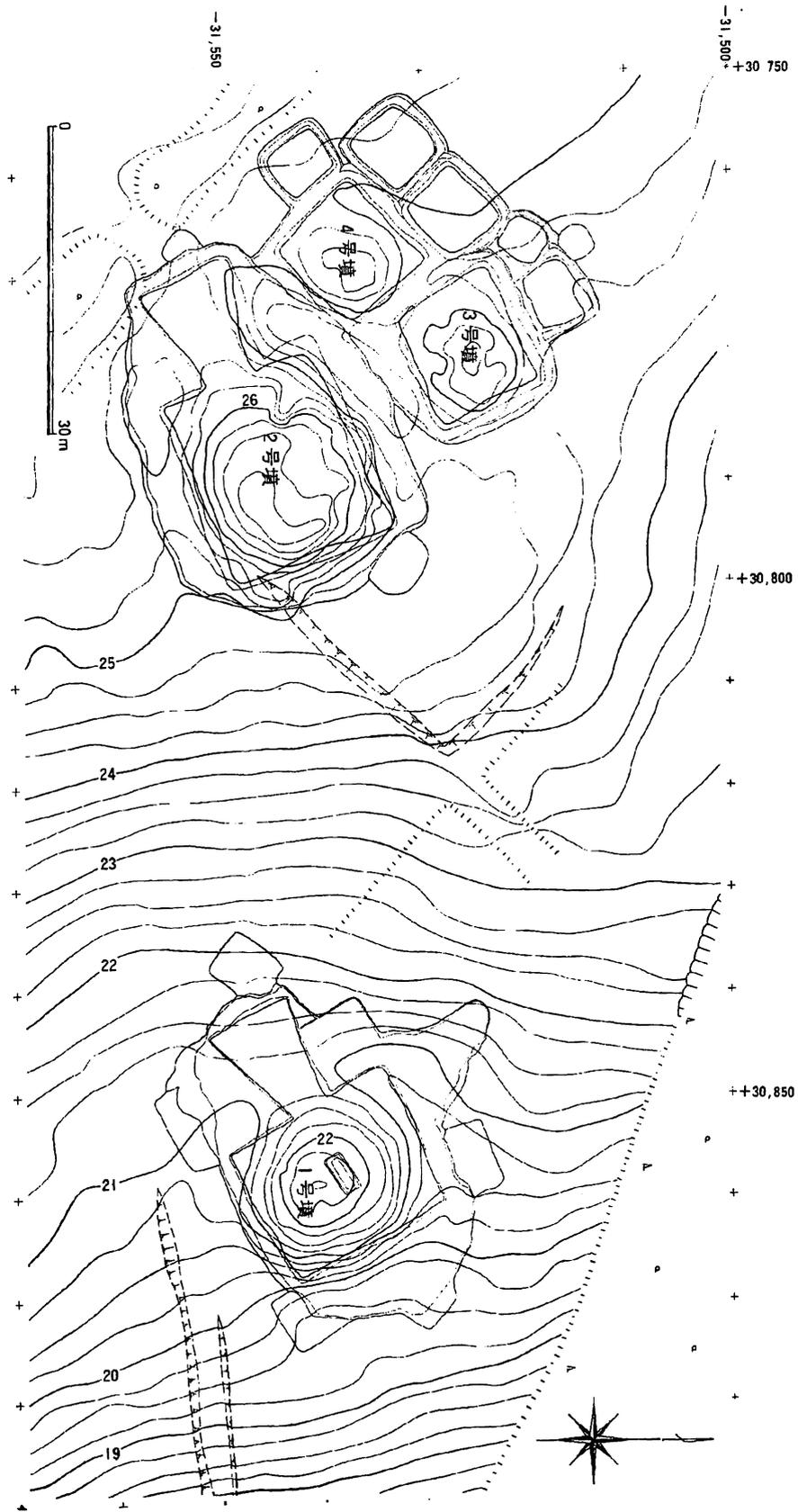
88-(1) 飯合作(いごうさく) 1号墳(第211, 212図) 草刈Ⅱ期併行

- ①所在地 佐倉市下志津字飯合作266-9 ほか(3, 4号墳以下も同じ)
- ②墳形 前方後方墳
- ③規模 主軸長約25m, 周溝を含めた全長約37m, 後方部について後背部15.7m, 前縁部17.0m
側縁長南13.6m, 北14.2m
- ④墳丘 後方部のみに認められる。約3m
- ⑤主体部 木棺直葬
- ⑥概要 印旛沼に注ぐ手操川中流に面した台地上に位置する。やや不整な菱形状の台地であり、地形的に見てひとつの独立した遺跡になる。竪穴住居跡群, 方形周溝墓, 前方後方墳, 方墳という各種遺構が存在するが, いずれも「五領式」の範疇で展開していく。その中で報告者の沼沢氏は「古墳」と「方形周溝墓」の本質について言及されている。注目すべき点は1, 2号の前方後方墳について副葬品の貧弱さや周囲に方墳が取り付いている現象を捉え, 「その被葬者は従来の方形周溝墓被葬者より格段と卓越した存在であるとは考え難い」としていることである。1号墳は標高約21mの緩斜面上に所在する。周溝は不整形であり, 廃絶された竪穴住居跡の凹みを利用した周溝を造ったり, 北側に大きく舌状に張り出した部分がある。後方部の盛土は中央部から開始され, 周囲に封土を貼り付けている。旧表土面は山焼きが行われている。封土内より銅鏃が出土したが, これは周溝下の竪穴住居跡の所産と指摘されている。古墳の年代観を示す遺物は主体部より出土したガラス玉3個と墳頂部表土直下出土の底部穿孔ひさご類形の壺(01)のみである。02, 03は周溝内出土で混入品と報告されている。私見ではひさご類形の壺(01)及び銅鏃は, 北ノ作1号墳(前方後方墳)でも同型式と思われるものがセットで出土しており, 飯合作1号墳の銅鏃も古墳に伴う可能性は否定できない。一方, 壺(01)は草刈Ⅱ期後半までの編年観もある。結論を言えば北ノ作1号墳同様に銅鏃を含めれば草刈Ⅱ期前半, 古い時代の混入品とすれば草刈Ⅱ期後半まで下がる編年観と言えよう。

- ⑦報告書 『佐倉市飯合作遺跡』 財団法人千葉県文化財センター 1978
(3, 4号墳以下も同じ)

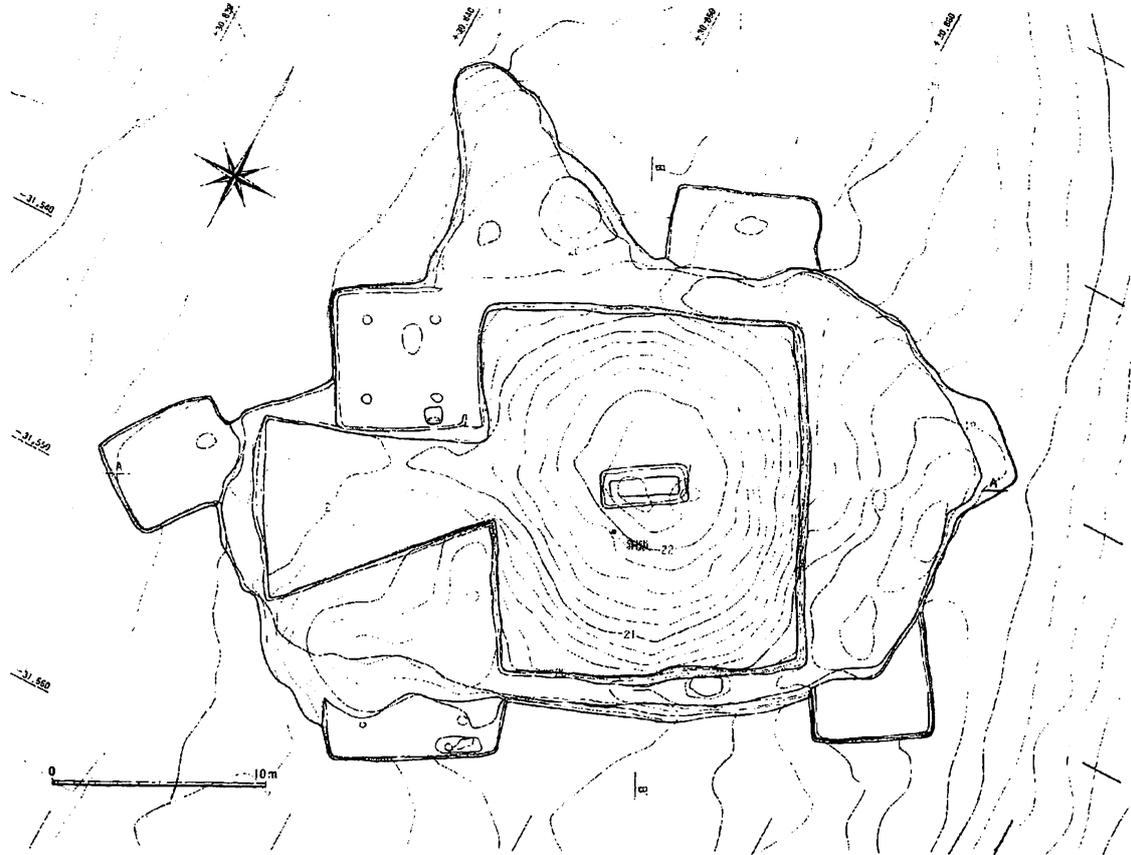
88-(2) 飯合作3, 4号墳(第213図) 草刈Ⅱ期併行

- ②墳形 いずれも方墳
- ③規模 3号墳=長辺12m×11m, 短辺10m×9.5m
4号墳は不明であるが3号墳とほとんど同一規模
- ④墳丘 いずれも有り, 墳頂部から旧表土面まで0.8~0.9m
- ⑤主体部 不明
- ⑥概要 前方後方墳である2号墳に取り付く状態で造られている。3, 4号は周溝を共有していたと考えられる。2, 3, 4号墳の明確な先後関係は認められず, かなり近接した時期に築造されたと報告されている。しかし, 小形の方形周溝墓と報告された一群(D01~)は, 3, 4号墳の築造後, 周溝がかなり埋没した段階で営まれたことは断面観察で明らかである。草刈Ⅱ期の段階では, 地域によっては既に有力な前方後方墳の出現を見ているが, 同時期に前方後方墳をめぐる墓制のあり方が具現化されたのが本遺跡であろう。はたして1, 2号墳=前方後方墳の被葬者と3, 4号墳=方墳被葬者ではどれほどの階級格差があったのか, 少なくとも副葬品, 出土土器等による格差はない。

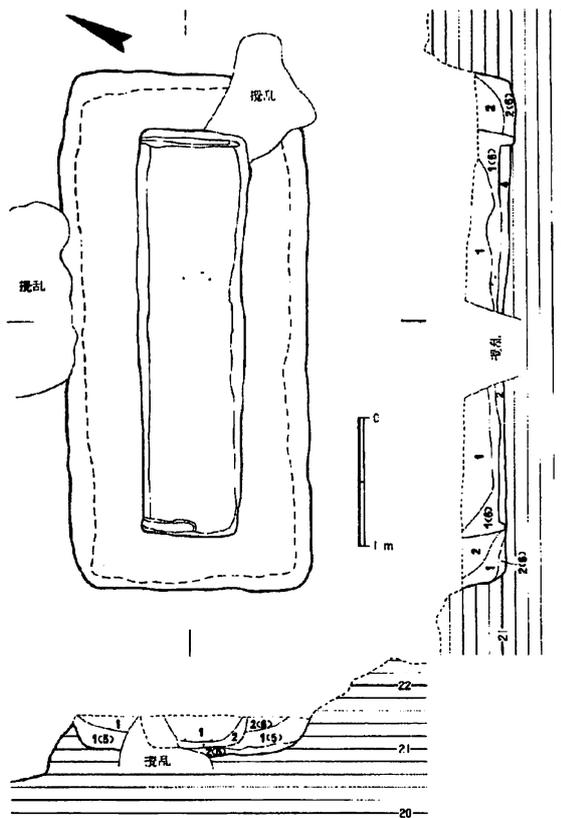


1～4号墳墳丘実測図

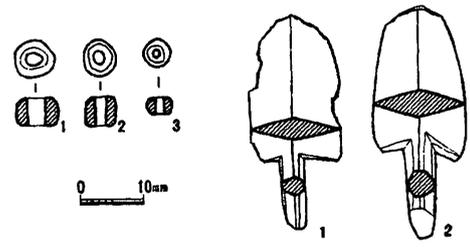
第211図 飯合作1号墳～4号墳位置図



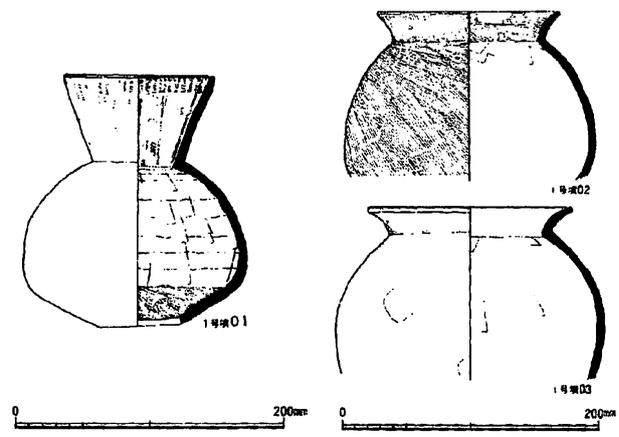
表土除去，周溝発掘後の飯合作1号墳実測図



飯合作1号墳の内部施設実測図

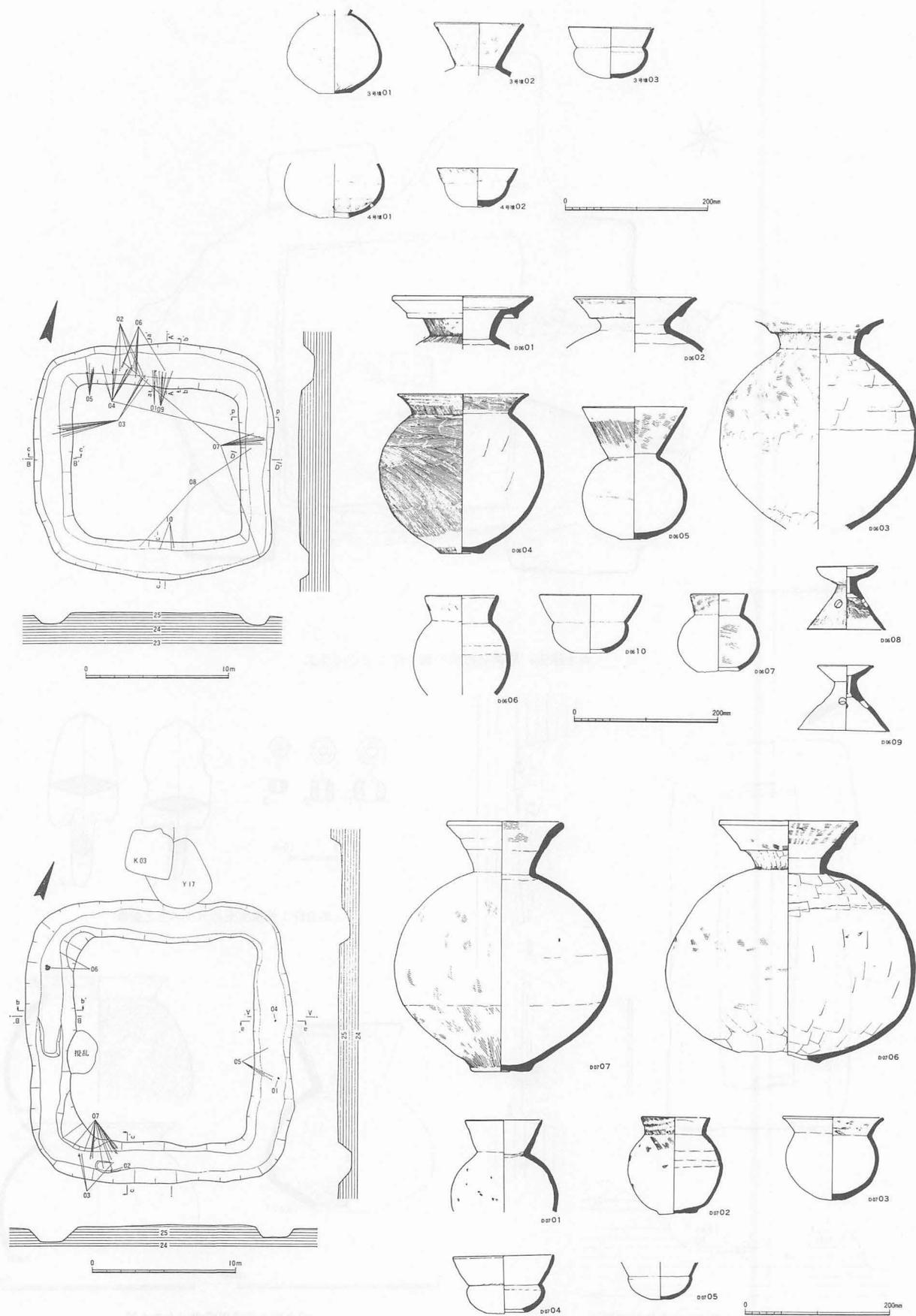


飯合作1号墳出土のガラス玉と銅鉄



飯合作1号墳周溝内出土の土器

第212図 飯合作1号墳平面図，主体部図，出土遺物図



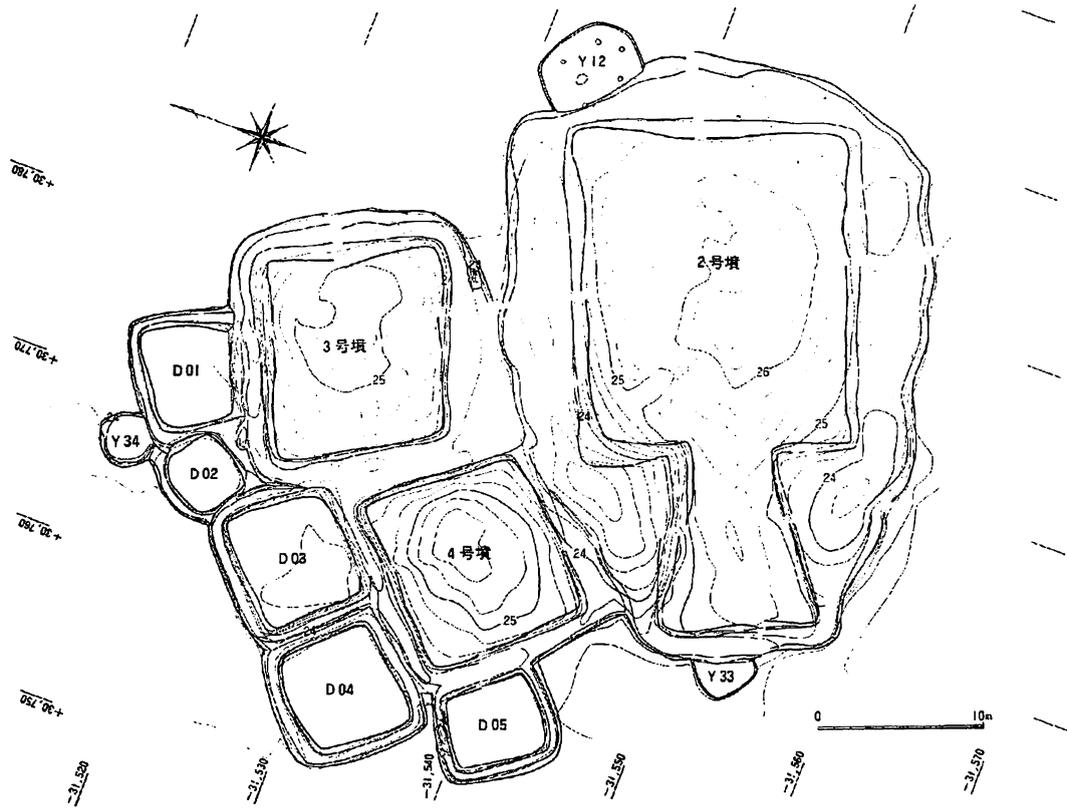
第213図 飯合作3号・4号墳(上), D06号(中), D07号(下)平面図, 出土遺物図

88-(3) 飯合作2号墳(第214図) 草刈Ⅱ期(後半)併行

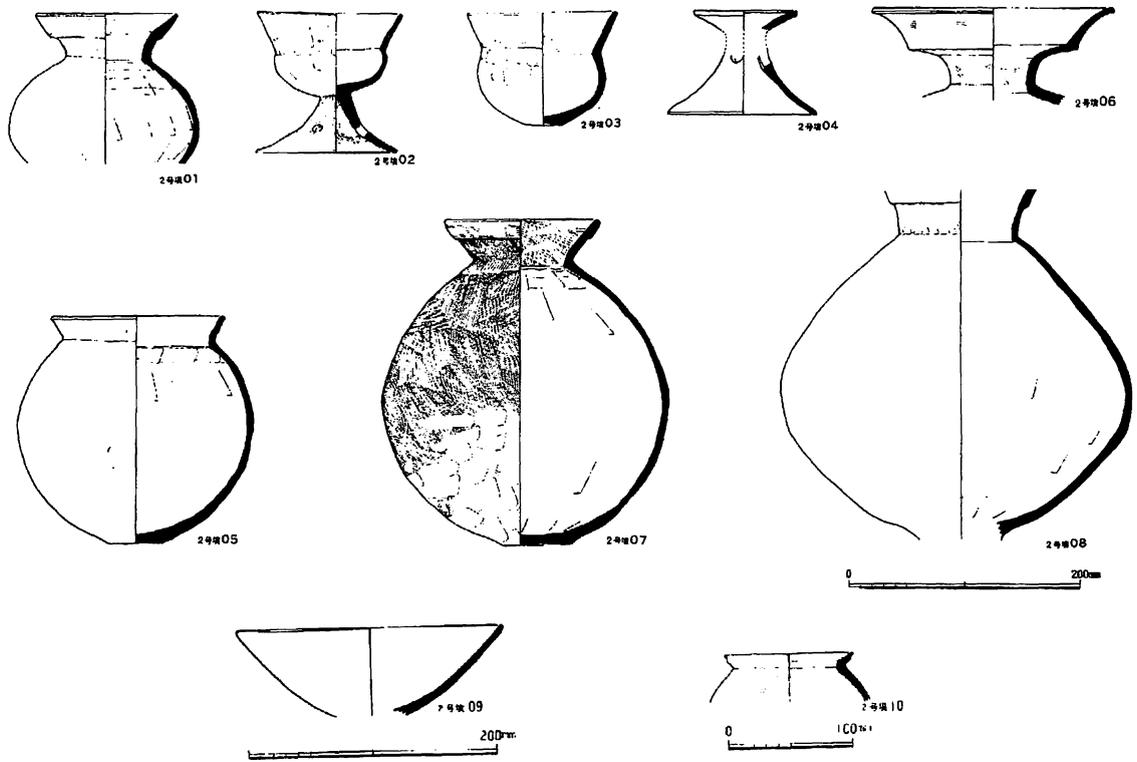
- ②墳形 前方後方墳
- ③規模 主軸長約29.5m～30m(後方18.5m前方11～11.5m),周溝を含めた全長約36.5m,後方部について長辺南18.5m,北19m,幅は後背部16m,くびれ部15m
- ④墳丘 後方部のみ認められ約1.5m
- ⑤主体部 不明
- ⑥概要 1号墳に比べやや大形であり,周囲に3,4号方墳や方形周溝墓群が取り付いているのが特徴である。周溝はくびれ部で深く,前方部で浅く狭いという諸点は1号墳にも共通し,他の地域の前方向後方墳にも共通した周溝の掘り方と指摘されている。土器については,出土状態の綿密な検証から混入品等の見極めがなされ,図示した中で(10)のS字甕片と(05)の甕については除外すべきとされている。また飯合作1,2号墳の新旧関係については言及されておらず,ほぼ同一時期の所産とされている。私見では先述のとおり飯合作1号墳は前期1もしくは2に属する可能性を指摘したが,2号墳にも同様な型式観がある。(06)の有段口縁壺は北ノ作1,2号墳に共通し,(08)の形骸化した有段口縁壺及び(02),(03)には草刈Ⅱ期後半の型式観がある。ここでは遺存度及び出土量の優位性からの判断であるが,草刈Ⅱ期後半の位置づけをしておきたい。飯合作遺跡で重要な視点は,沼沢氏によって方形周溝墓,(小規模)前方後方墳,(小規模)方墳がそれぞれ概念規定されていることである。私見により要約すれば①共同体内の自律的展開課程の中で方形周溝墓の初現には大きな画期がある。②小規模な前方向後方墳の出現は方形周溝墓から一部地域では自律的に発生したとも考えられるが,定形化した飯合作1,2号墳の出現はやはりその祖元を在地的には求め得ない。あくまで外的な要因により成立したものである。③しかし,前方後方墳という現象面では画期になっても,共同体内部では,従来の方墳周溝墓被葬者より卓越した人物ではなかった。それは飯合作1,2号墳の貧弱な副葬品,後に方墳が取り付く状況等から想定できる。④前方後方墳に取り付いた小規模な「方墳」は従来の方墳周溝墓と構造的にほとんど変化がない。こうした沼沢氏の視点及び当時の早稲田大学による国分寺台遺跡群の調査が,その後の房総地方における前期古墳研究の起点となっている。

88-(4) 飯合作D6, D7(第213図) 草刈Ⅱ期(後半)併行

- ②墳形 方墳(報告では方形周溝墓)
- ③規模 D06=16.5m×16.6m, D07=18.5m×20m(いずれも外縁)
- ④墳丘 いずれも無し
- ⑤主体部 D06=不明, D07=周溝内土坑
- ⑥概要 2号(前方後方墳)に3,4号方墳が,そしてさらに両者に方形周溝墓群が取り付いた状況が認められる。方形周溝墓はいずれも出土遺物も比較的豊富であり,草刈Ⅱ期(後半)という編年観が与えられる。これらの中で,方形周溝墓とするか方墳とするかで迷うものもあり,特にD06, D07は墳丘を持つ3,4号墳を規模に置いて凌駕している。古墳と方形周溝墓の明確な区分をどこに求めるか,少なくとも出土遺物に格差は無く,異なるのは墳丘の有無,大きさ,立地である。



表土除去，周溝発掘後の飯合作2号墳等実測図



飯合作2号墳等の周溝内出土の土器

第214図 飯合作2号墳平面図，出土遺物図

88-(5) 飯合作 D8～D19 (第215, 216図) 草刈Ⅱ期(後半) 併行

②墳形 方墳(報告では方形周溝墓)

③規模 D08=6.7m×6.9m, D09=10.3m×11.6m, D10=9m×10.4m

D11=11.3m×11.5m, D12=14.7m×15.5m, D13=12.8m×13m

D14=9.3m×9.3m, D15=8.7m×7.2m, D16=9.5m×9.8m

D17=11.0m×10.2m, D18=17.1m×15m, D19=10.0m×10.3m(いずれも外縁)

④墳丘 いずれも無し

⑤主体部 D08, D09=周溝内土坑 他は不明

⑥概要 D08の周溝内土坑からは凝灰岩の管玉, ガラス玉, 水晶玉が出土している。D9の周溝からは凝灰岩勾玉が出土している。D12は単独で存在し, 15m級である。周溝の一部が切れるD18についても時期的な差は認められない。このように墳丘を有する故に古墳とされた3, 4号墳よりもむしろ方形周溝墓とされたこれらの一群の副葬品が目立っている。

89. 臼井南渡戸(うすいみなみわたりど) B地点第Ⅰ周溝墓, 第Ⅱ周溝墓(第217図)

草刈Ⅱ期(前半) 併行

①所在地 佐倉市臼井字渡戸

②墳形 方墳(報告では方形周溝墓)

③規模 第Ⅰ=外縁15.2m×13m 第Ⅱ15.9m×15m

④墳丘 いずれも無し

⑤主体部 いずれも不明

⑥概要 周囲に同時期の住居跡が点在するが, 方形周溝墓が墓域として明確に区分されていたとは想定しづらい。出土土器は東海地方西部のパレス壺の搬入品と考えられる装飾壺2点である。同型式のものが1号住居跡でも出土しており, 草刈Ⅱ期前半に比定される単口縁甕, 壺が共伴していることから, 本遺構も同様の編年観を与えておきたい。

⑦報告書 『臼井南遺跡調査報告書』佐倉市教育委員会 1975

90. 棒作(ぼうさく)1号(第217図) 草刈Ⅰ期併行

①所在地 佐倉市六崎棒作

②墳形 方墳(報告では方形周溝墓)

③規模 台状部幅10.4m, 外径13.8m

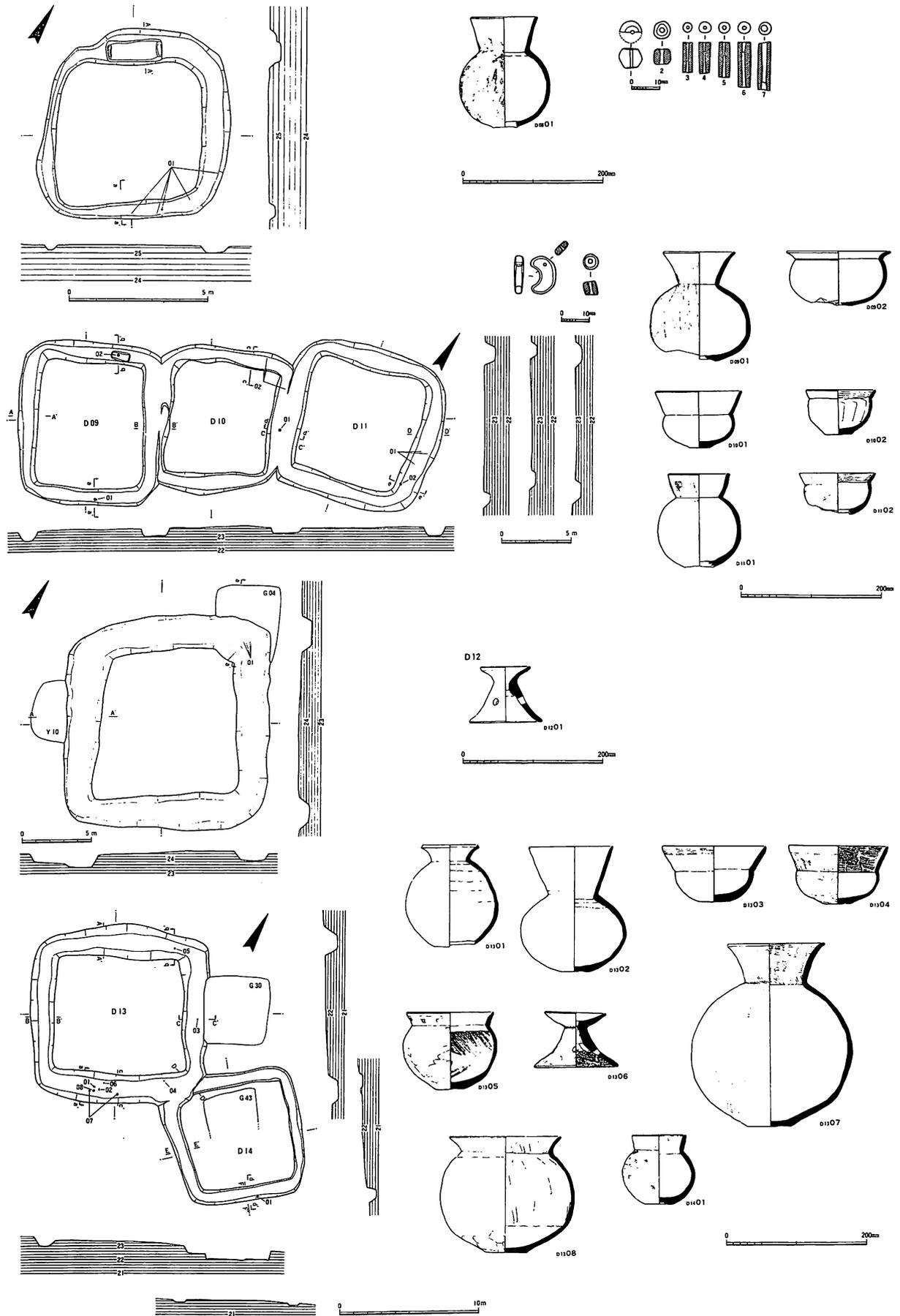
④墳丘 無し

⑤主体部 不明

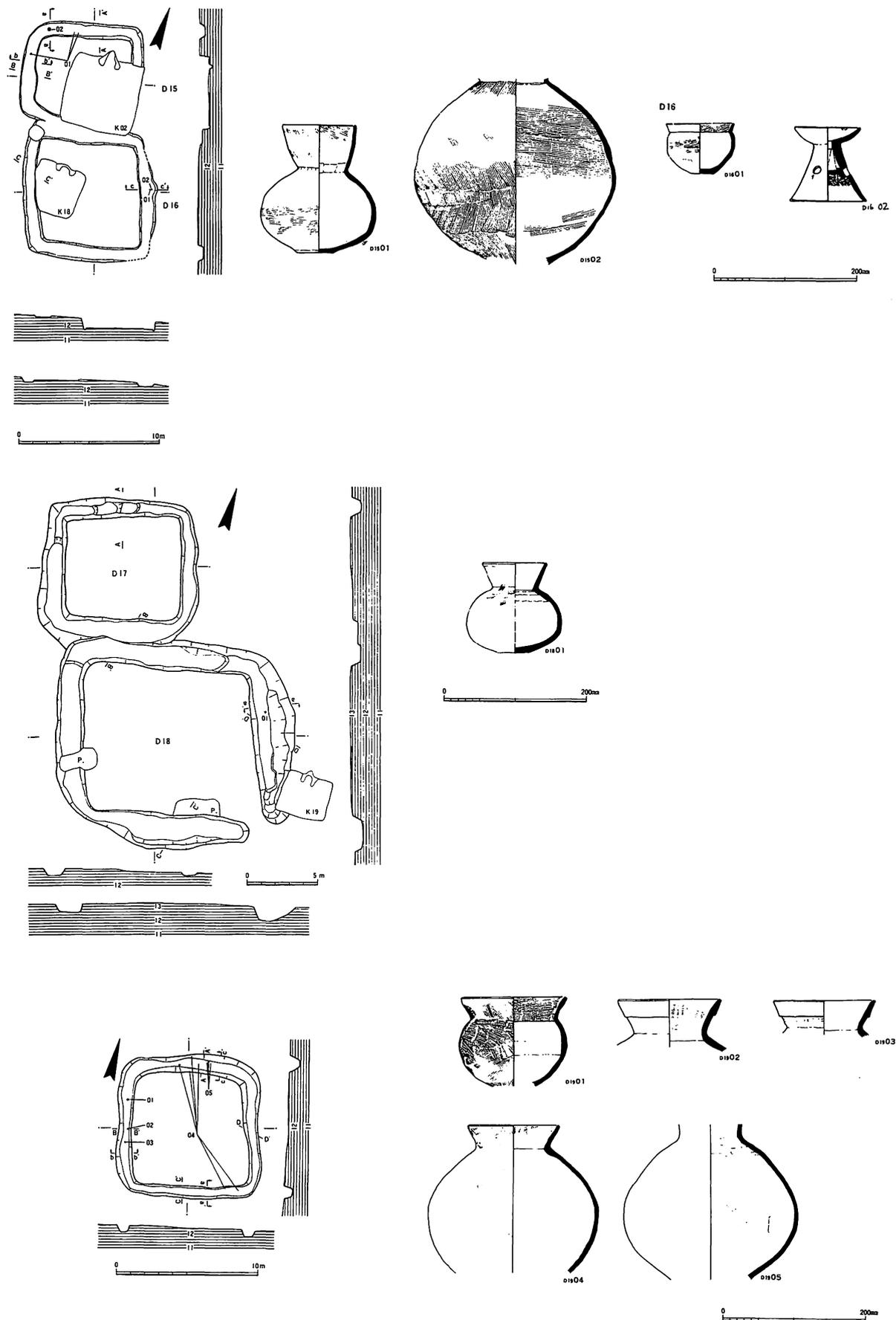
⑥概要 大崎台遺跡から小台地を挟んで約150m程東側に位置し, 台地西端の標高は16mを測る。1号は古墳時代前期の集落の中に単独で存在し, 特に南側周溝に接するような状況で, 主軸を一致させた住居跡も共存している。出土土器からほとんど時期差がないと考える。このように墓跡と住居跡があまりに近接している。また, 方台部から検出された住居跡第47号との新旧関係は不明である。出土土器は底部穿孔の有段(二重)口縁壺であるが系譜の断定が難しい。本遺跡では同様な壺に頸部凸帯がつく東海系土器や北陸系高坏も見られるため, どちらかの影響を受けていると考えたい。

⑦報告書 『棒作遺跡発掘調査報告』佐倉市棒作遺跡調査会 1985

第2章 前期古墳等の概要

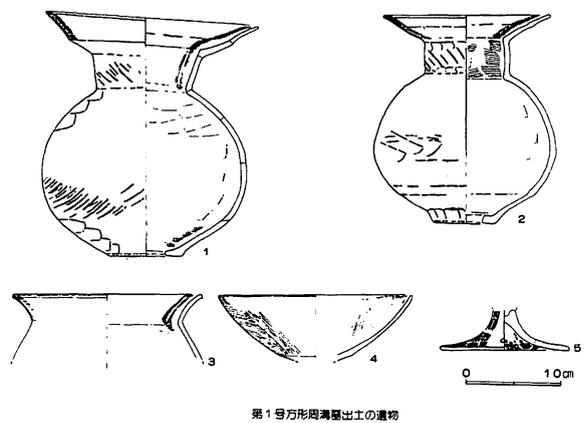
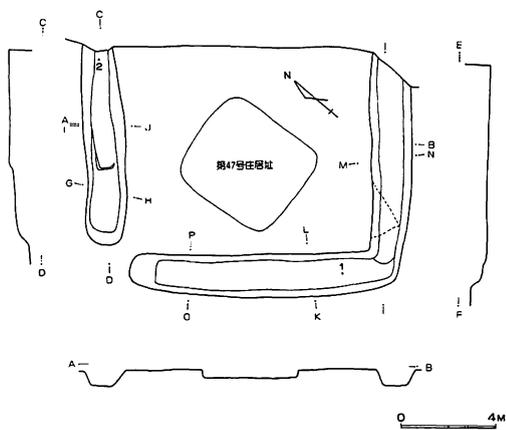
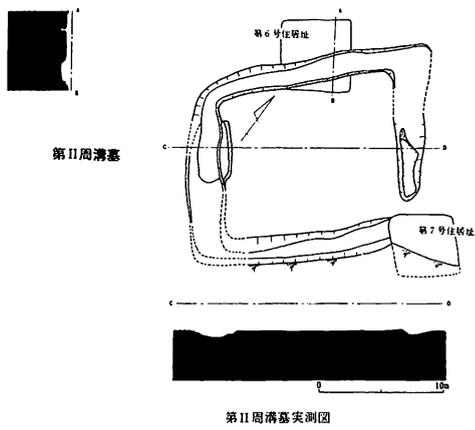
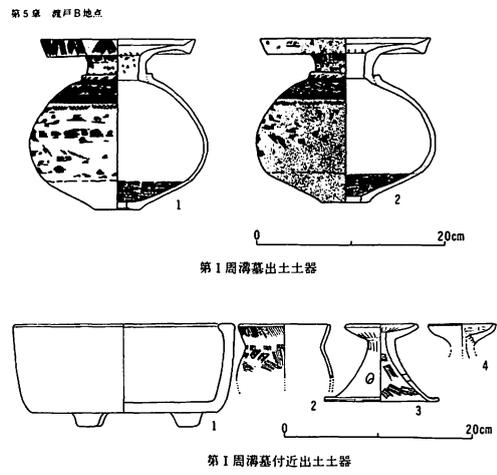
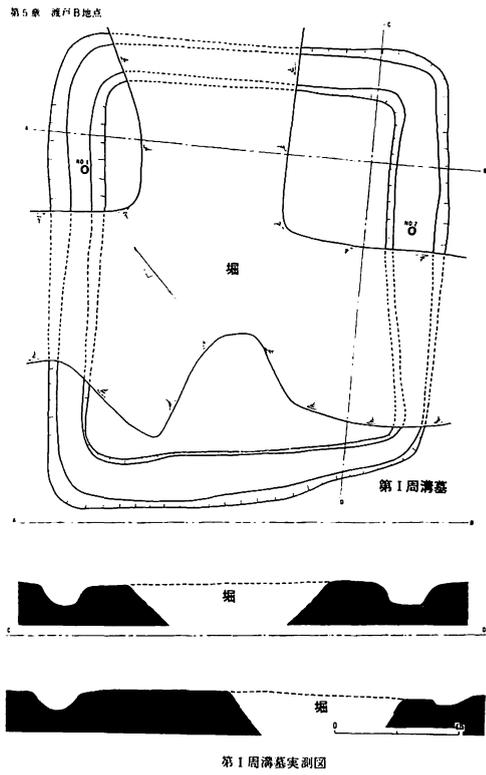


第215図 飯合作 D 8 号～ D 14 号平・断面図，出土遺物図



第216図 飯合作 D 15号～ D 19号平・断面図，出土遺物図

第2章 前期古墳等の概要



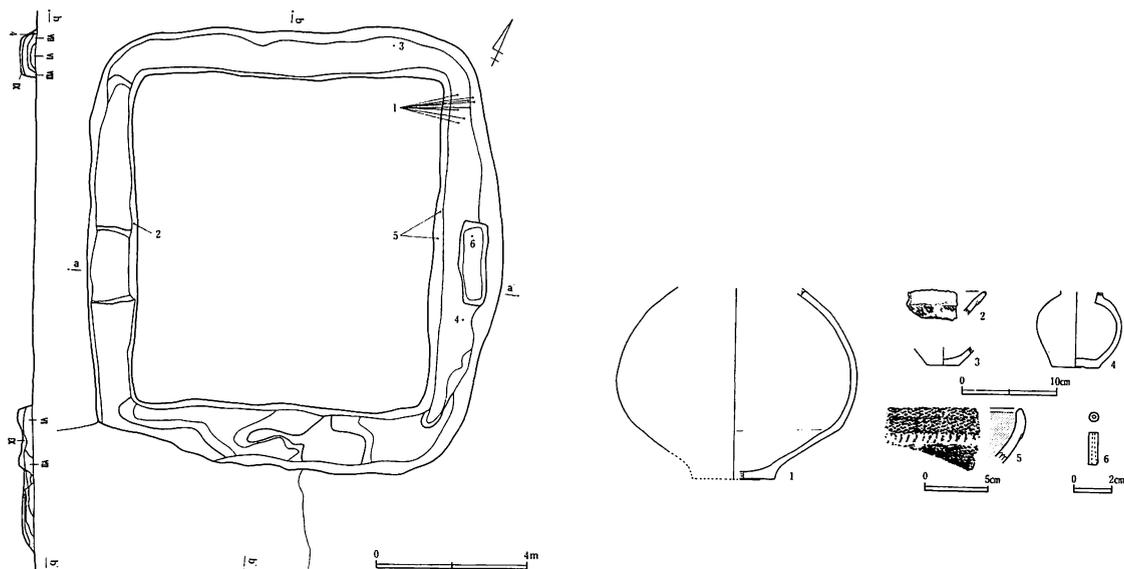
第217図 臼井南渡戸B地点第I，第II周溝墓，棒作第1号周溝墓平・断面図，出土遺物図

91. ヲサル山（おさるやま）MB 001号, 002号, 003号（第218, 219図） 草刈I期併行

- ①所在地 八千代市大和田新田字ヲサル山608ほか
- ②墳形 いずれも方墳（報告では方形周溝墓）
- ③規模 001号=台状部9.78m×10.52m 002号=7.8m×8.67m 003号=4.78m×5.8m
- ④墳丘 いずれも無し
- ⑤主体部 001号=中央土坑 002号=周溝内土坑 003号中央土坑
- ⑥概要 古墳時代前期集落内に住居跡と共存する状況で立地している。MB001号からは硬玉勾玉、ガラス玉、ミニチュア土製品等多く出土している。002号からは碧玉製管玉が出土している。001号の羽状縄文が施された壺はじめ土器の組合せは、後述する石揚遺跡出土土器に類似し、いずれも草刈I期併行である。
- ⑦報告書 『八千代市ヲサル山遺跡』 財団法人千葉県文化財センター 1986

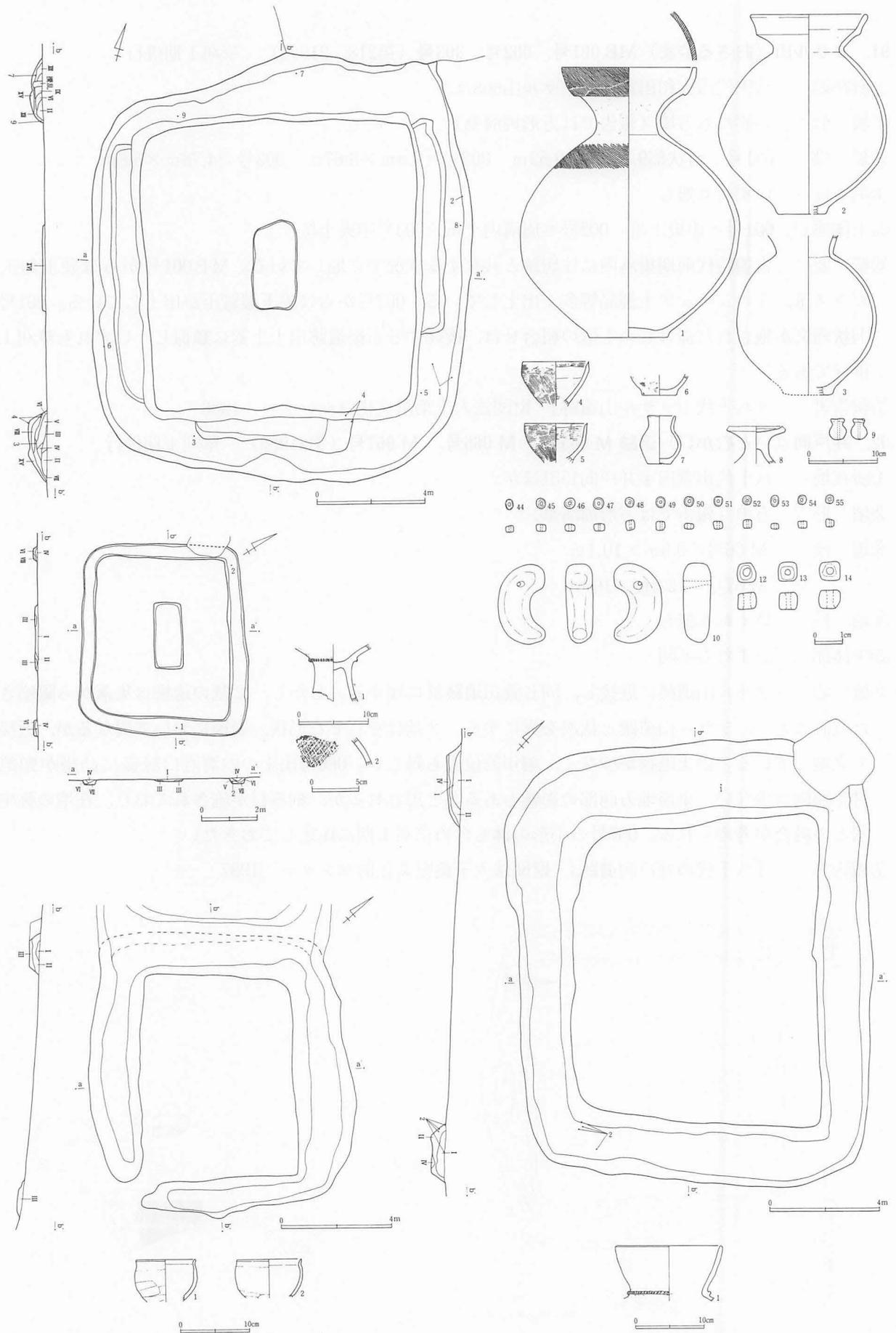
92. 井戸向（いどむかい）遺跡 M 065号, M 066号, M 067号（第219図） 草刈I期併行

- ①所在地 八千代市萱田字井戸向1531ほか
- ②墳形 方墳（報告では方形周溝墓）
- ③規模 M 66号=9.3m×10.1m
M 67号=12.8m×16m
- ④墳丘 いずれも無し
- ⑤主体部 いずれも不明
- ⑥概要 ヲサル山遺跡に近接し、同じ萱田遺跡群に属する。しかし、2基の遺構は集落から隔絶された位置にあり、ヲサル山遺跡と状況を異にする。2基はそれぞれ形状、規模において異なるが、近接して立地している。出土遺物が少なく、編年の位置も難しい。066号出土の内湾直口縁壺に凸帯が頸部に付く類例は少ない。東海地方西部の影響もあるかと思われるが、刻み目が施されており、在地の弥生土器との融合が考えられる。067号の小形の鉢も含め草刈I期に比定しておきたい。
- ⑦報告書 『八千代市井戸向遺跡』 財団法人千葉県文化財センター 1987



第218図 ヲサル山 MB 002号平・断面図, 出土遺物図

第2章 前期古墳等の概要



第219図 ラサル山M B 001号, 003号, 井戸向M066号, 067号平・断面図, 出土遺物図

93. 公津原（こうづはら）H9号 草刈Ⅱ期併行，H17号墳（第220～222図）草刈Ⅲ期併行

①所在地 成田市橋賀台979

②墳形 H9号墳＝方墳 H17号墳＝円墳

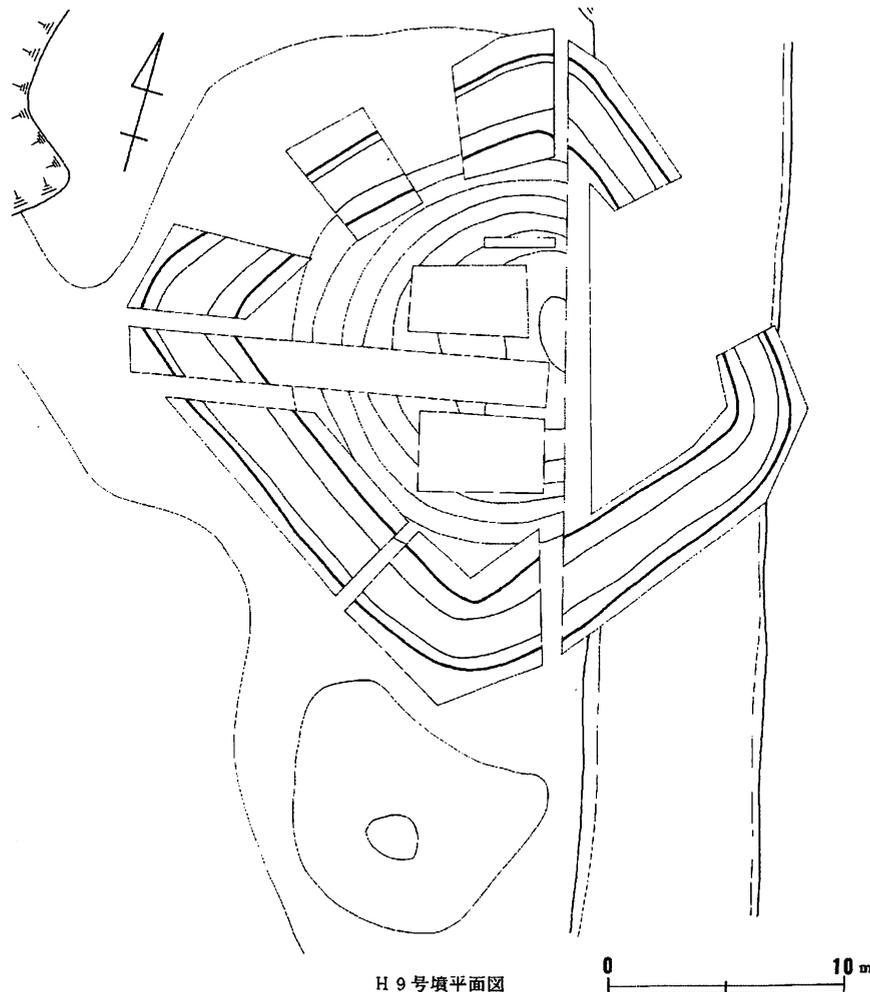
③規模 H9号墳＝18.2m×17.4m H17号墳＝直径25m

④墳丘 有り，H9号墳＝高さ1.59m H17号墳＝高さ2.5m

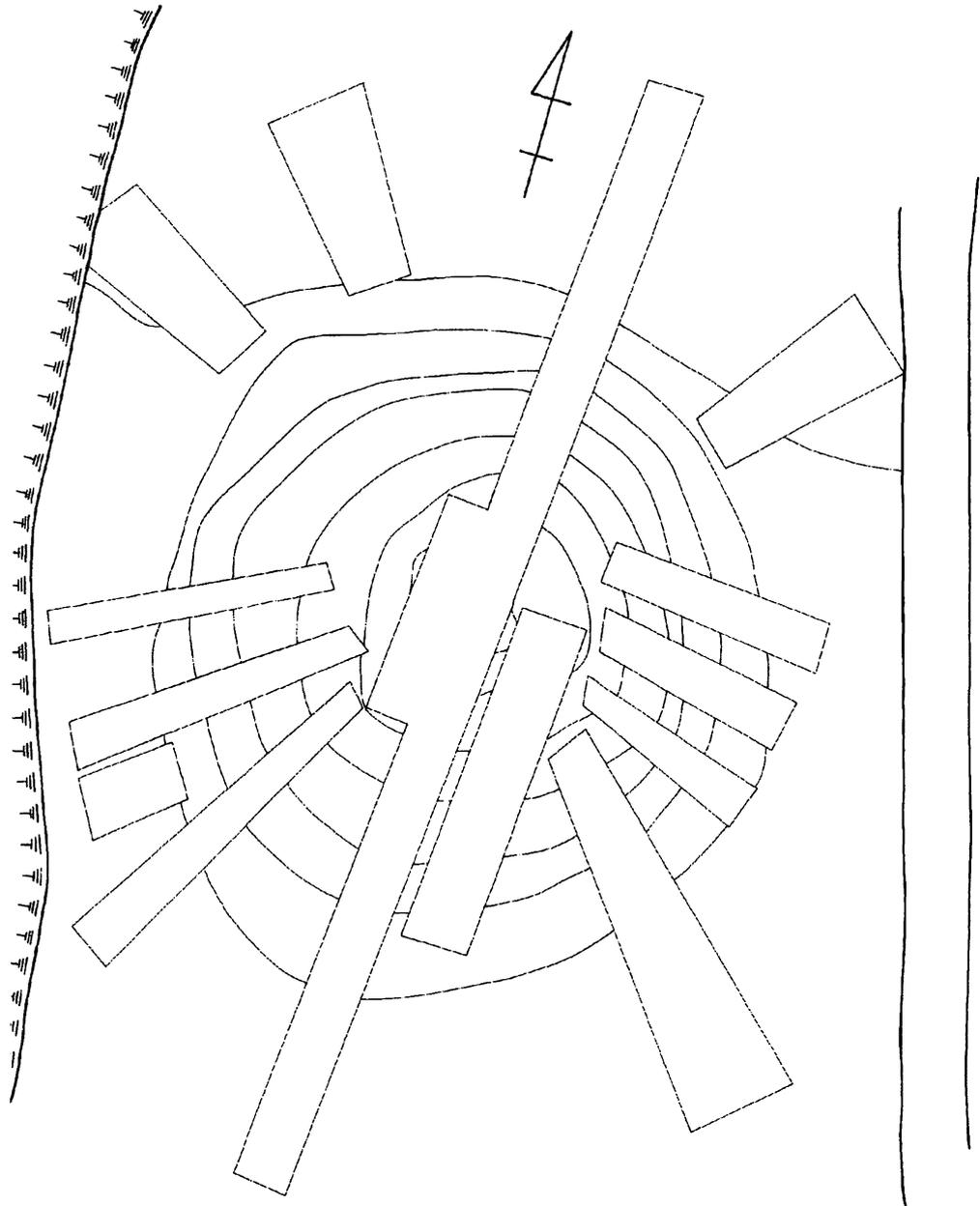
⑤主体部 共に不明

⑥概要 瓢塚古墳群（現在は公津原古墳群に含まれる）に含まれ，前方後円墳（5号墳）を取り囲む7基の方墳群の一つである。5号墳については詳細は明らかでない。H9号墳からはほぼ完形の壺が周溝底に密着して出土している。公津原編年では2期（草刈Ⅱ期後半併行）に相当するであろうが，頸部が比較的絞り込まれている形状は公津原遺跡では古式と言える。一方H17号墳は円墳であり，出土土器を見てもH9号墳に後出する。報告では「和泉期の住居跡が墳丘下に存在した」とあり，図示した土器も混入品が多いと指摘されている。しかし，公津原編年2期（草刈Ⅲ期併行）を中心とした土器が主体を占めている。公津原編年は既に指摘したように，柱状脚高坏が草刈編年に比べ早く出現する傾向があり，「和泉式」という概念が全面に出てしまい，このような古墳が中期以降に所属されがちであるが，概ね草刈Ⅲ期併行としておきたい。H17号墳からは乳文鏡一面，鉄斧1点が出土している。

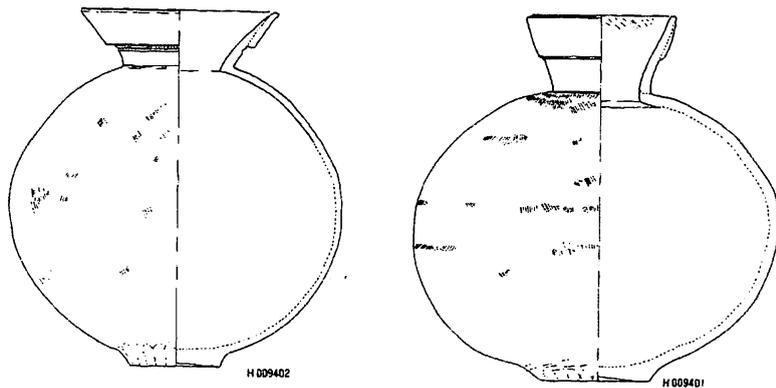
⑦報告書 『公津原』財団法人千葉県文化財センター 1975



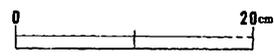
第220図 公津原 H9号墳平面図

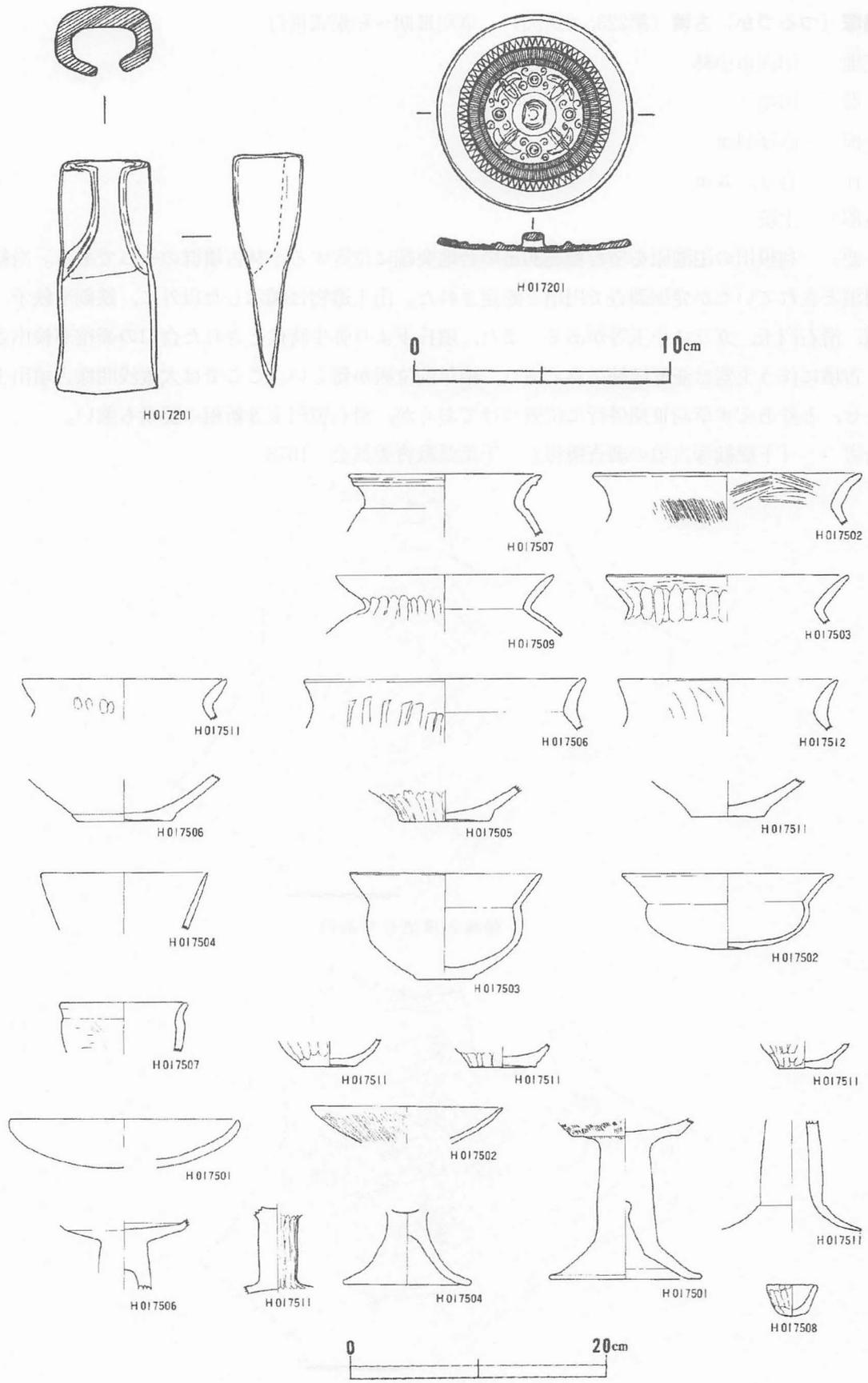


H17号墳平面図



第221図 公津原 H17号墳平面図, H9号墳出土遺物図





第222図 公津原H17号墳出土遺物図

94. 鶴塚（つるづか）古墳（第223, 224図） 草刈Ⅲ期～和泉式併行

①所在地 印西市小林

②墳形 円墳

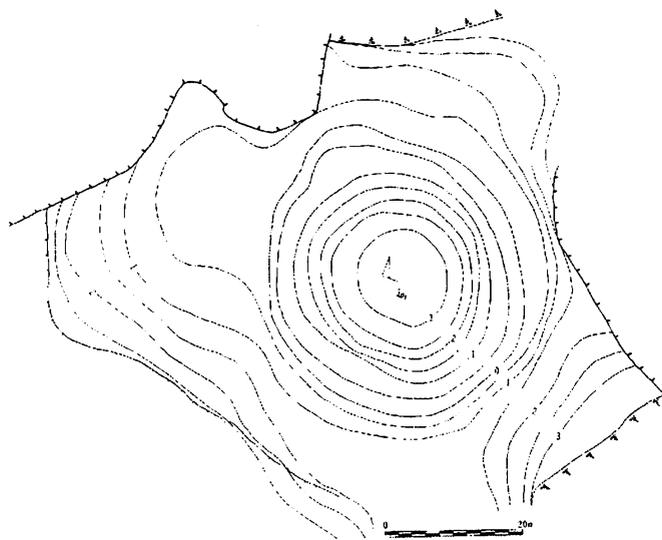
③規模 直径44m

④墳丘 有り, 3m

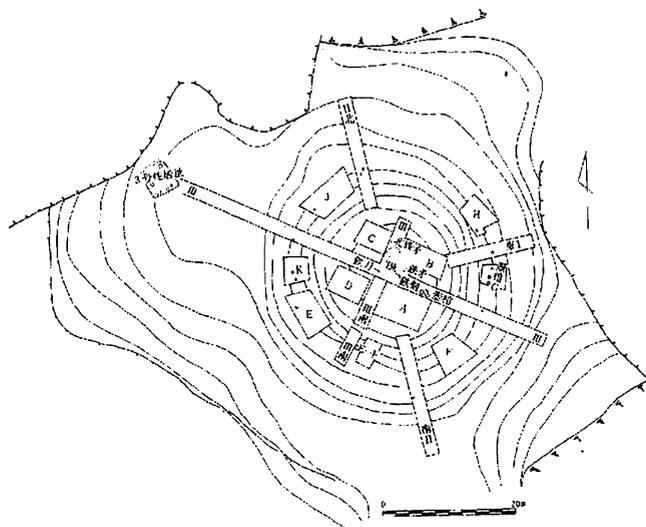
⑤主体部 土坑

⑥概要 利根川の氾濫原を望む標高30mの台地突端に位置する小林古墳群の一つである。当初は前方後円墳とされていたが発掘調査で円墳と断定された。出土遺物は図示した以外に、鉄剣や鉄矛、刀子、鉄鏃、滑石臼玉、ガラス小玉等がある。また、墳丘下より弥生時代とされた合口の壺棺が検出されている。古墳に伴う土器は壺形埴輪のみであり、編年の位置が難しい。ここでは大厩浅間様古墳出土例に比定させ、とりあえず草刈Ⅲ期併行に位置づけておくが、滑石製臼玉等新相の要素も強い。

⑦報告書 『下総鶴塚古墳の調査概報』 千葉県教育委員会 1973



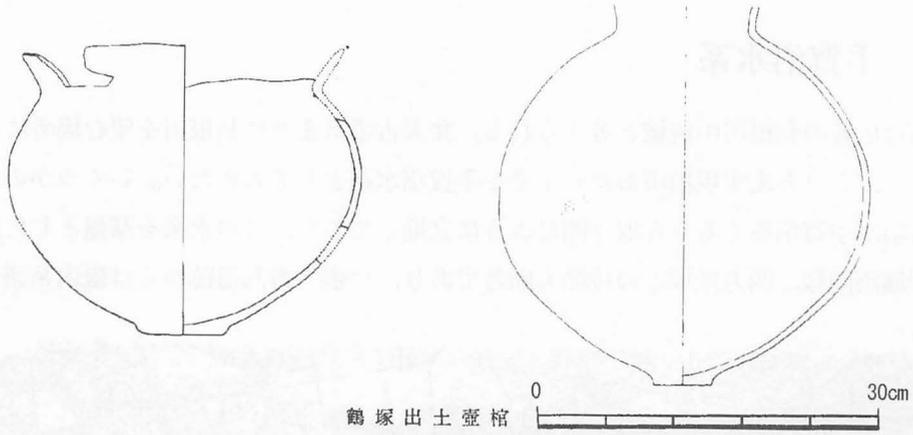
鶴塚古墳墳丘実測図



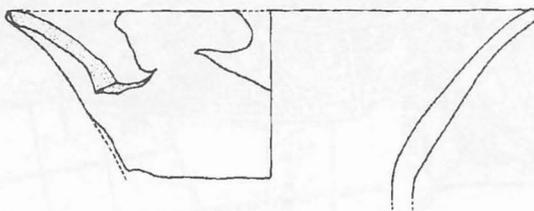
鶴塚古墳トレンチ並びにグリッド配置図

(○印は埴輪)

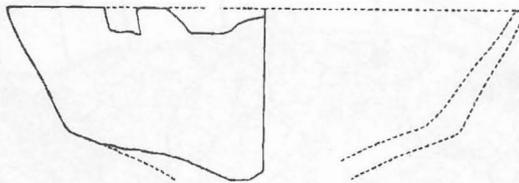
第223図 鶴塚古墳測量図



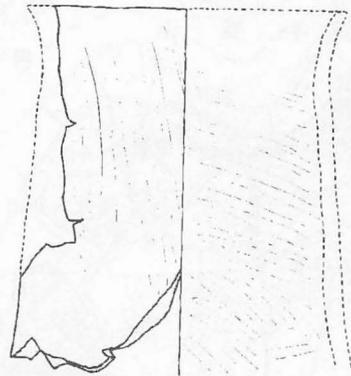
鶴塚出土壺棺
左は蓋・右は実



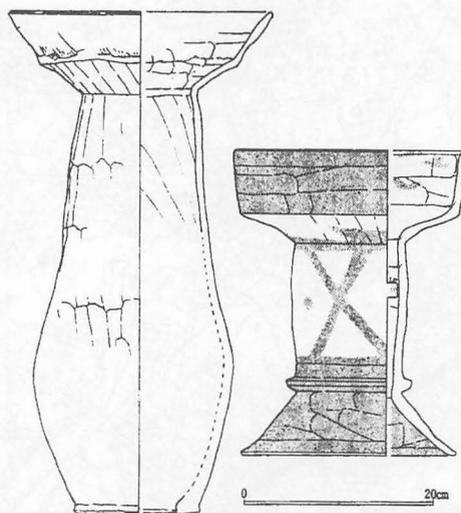
鶴塚古墳B区出土AⅡ類埴輪



鶴塚古墳J区出土AⅢ類



鶴塚古墳J区出土B類埴輪



鶴塚古墳の遺物

第224図 鶴塚古墳出土遺物図